

Japan Society of
the Graded Direct Method
and Basic English

No. 68

Year Book

2016年6月

発行：GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：伊達民和

東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax：045-934-8314

西日本支部 〒567-0034 茨木市中穂積1-5-B-605 此枝洋子方 Tel：080-8167-1993

<http://www.gdm-japan.net/>

巻 頭 言

伊 達 民 和

日本は、ますます多文化・多言語的な国になってきている。その一方で、見事な日本語を話す外国人在住者や旅行・訪問者が増えてきている。海外での日本語教育が効果を上げている証であろう。そこで、思い出すのは、半世紀も昔に、ワシントン大学の日本語クラスを担当していた松田麻耶子の言葉である。「アメリカの大学で教えてみると、日本語の正式の教師につかずに、初歩の日本語を習ったアメリカ人に、大学のクラスで日本語を教えることは、大変やりにくいし、成果も上がりません。学生にとっても、日本ではかなり役立ったと思う日本語が、大学の試験ではいつも成績が悪く、学問的にはレベルの低い不正確な日本語と言われてガックリしてしまう」『外からみた日本語』（三省堂 1968: 128-9）。また、イギリスの学生についても、マークス寿子が、同じ趣旨のことを言っている。「日本に滞在したイギリス人は、みんなに“日本語がお上手ですね”と言われておだてられて帰ってくる。そして、あらためてもう少し日本語を勉強したい、読み書きも勉強したいということで大学に入ってきたり、大学院のコースに入ってくる。ところが、こういう人たちを相手に日本語を教えるのは、実はゼロから出発する人たちに教えるよりもはるかに難しいのだ。（中略）砕けた日常会話だけはできるが、正しい会話や読み書きができない人たちに、どうおもしろく教えるか、という工夫が必要なのである。』『爆発的英語教育改革論』（草思社 1995: 211-2）。

読み書きの能力は、語学学習の屋台骨である。留学すると日常会話には多少とも上達するが、私の印象では、読み書きでは、たいてい留学前のレベルのままである。巷間では「文法指導が邪魔になって会話ができない」とか「会話ができるようになった上で文法を学んでこそ生きた英語が身につく」というような意見をよく聞かすが、冒頭の引用文は、他山の石となる内容である。

内 容

巻頭言	伊達 民和	1
1. ベーシックを通して知ることばの働き、英語の特質	相沢 佳子	2
2. a / the の教え方について最近考えていること	唐木田照代	10
3. Learning Basic English at Monthly Meeting	麻田 暁枝	12
4. 今、中学校の授業に求められていること	松浦 克己	13
5. 「言いたいこと」と英語力の間	吉沢 郁生	16
6. EP as Literature and a Good Education	Brian Small	23
7. 文学作品に見る情景・状況描写の遠近法と Basic / Wider Basic — 小説 <i>For Whom the Bell Tolls</i> (Ernest Hemingway, 1940) を題材として —	後藤 寛	32
8. [Basic English 読み物] Who is poor?	千葉 洋子	51
9. 英語力	齊藤 直美	55
活動報告（東日本支部&西日本支部）		56
編集後記		59

1. ベーシックを通して知ることばの働き，英語の特質

相 沢 佳 子

(これは昨年12月のGDMの会での話を基にそれを展開したものである)

昨今グローバル時代の英会話術として Globish¹⁾が流行って関連本も何冊か，またアプリもいくつか出ている。非ネイティブには完璧な英語でなくてもビジネスや旅行などにと単語も1500，文法も簡単なやさしい英語として勧めている。ベーシック（以下BEと略）と同じ小英語ではあるが，ただその背後にことばや英語に対する考察は見られずBEとは根本的に異なる。

ご存じのようにBEという画期的な小英語体系の仕組みの背後には心理学者，哲学者でもあった考案者Ogdenのことばへの深い洞察，英語の特質などの幅広い知識が組み込まれている。『意味の意味』でことばの混乱を分析しその出口を提供し，実際にことばの正しい使い方を保証するものとしてBEは考案された。英語の本質の深い所に根ざしたBEは実用的な英語習得だけでなく，一般には気づかないことばの働きなどを教えてくれる。Richardsも「BEの構想は言語の働きの主要原理に立ち戻らせる²⁾と評し，それらの考えをGDMに取り入れている。私たちはBEの学習過程で，自然とBEの特徴でもあるそのような大切なことを身につけ，また英語特有の表現に慣れてくる。ただ日常特に意識はしないと思われるので，今回改めてBEの特徴からいろいろ考えてみたい。

先ずBEではことばの働きをどのように見ているのだろうか。850の語表からも分かるように次の4項目があげられている。

- 1) 物を指し示す
- 2) 感情の表現，物の区別をする
- 3) 人の基本的動作を表す
- 4) 方向を示す

先ず話す対象物があり，人自身の動きや対象物の操作などの動作があり，位置や動きの方向を示す語があり，さらに物をはっきり区別したり感情を表す語がある。pointingでことばは人の体の手や目の働きの代わりをする。この4項目だけでは不十分のようだが，具体的な物や動作，方向などは比喩的に抽象的事象に広がり，また一般のことばは一語の中に複雑な意味を圧縮していることを考えれば，分析の手段としてはこれで充分と考えられている³⁾。この前提に立ってBEの特徴を考えていこう。

(1) 分析的表現

BEで使いたい語がなければそれが指す物や事の内容をくだいてやさしい語で表す，例えばpuppyはyoung dog，crimsonはbright redと。特に動詞はわずか16で分析的な表現は必須だ。一般の動詞の多くはBEの動詞，特に10のkey acts (do, have, come, go, get, give, put, take, make, keep)と20のdirectionsや対象を表す名詞との結合などで表せる。動詞の分解的な用法の代表的なものをあげる。

①基本的動作語＋前置詞・副詞（方位詞）

英語には日常的なゲルマン系の語と後から入ったformalなラテン系の語が共存している，

walker と pedestrian のように。また 16 世紀頃には分析性も進み ascend, descend に対して go up, go down などの分析的な結合動詞もよく使われるようになってきた。ただ go up などいわゆる動詞は日本人には比較的苦手である。しかしこれらは使い道も広く、慣れておくことは大切である。BE の動詞との結びつきは方位詞が代表的だが、他にも形容詞で clarify = make clear, prepare = get ready など、また前置詞句で appear = come into view, forget... = put...out of mind などもある。

②基本的動作語＋名詞

動詞は主に give, have, make, take で、名詞は walk, desire, agreement など動詞由来のものが使われる。give a cry / answer, give her a kiss / blow / order, have a sleep / walk / hope / respect, make a decision / stop / suggestion, take a breath / look / walk / care of など。この用法は英語ではよく使われているのに一般には余り知られていないし、日本人はめったに使わない。私は BE を学び始めた頃、頻繁に出会うこの用法にあまりなじみがなく不自然ではとさえ思った。そこで普通英語ではどうかと調べてみた。意識して英文を読むとこの用法が意外に多く使われているのが分かった。様々な分野の英語で出会った例文は 3,000 以上になり、それらを分析、研究したのが拙著『基本動詞の豊かな世界』（開拓社）になった⁴⁾。コーパスの結果もこの用法の頻度がかかなり高いことを示している（COBUILD 英々辞典など）。BE に出会わなかったら、私自身この事実は知らなかっただろう。

①、②いずれにしてもこのような分解的用法は分析的な英語だからこそ可能で、仏、伊、独、西、露など他の言語では同じようにはできない。私はこれら 5ヶ国語の動詞を Picture Series で調べてみた。同じ方針で語彙も制限して作られたのに英語とは違い、動詞の数は Book 1.2 でドイツ語以外 70~90 程度と多い⁵⁾。言語は成長の過程である程度は分析性へと進むが、英語はこれが極めて顕著なのだ。Ogden はこの英語の分析性という特質を見抜いて BE に上手に活用した。実際にも漱石などの英訳で日本人の訳が一語動詞なのに英米人の訳が分解的表現になっている例もある、例えば proceed と take a step, amend と put right, remove と take away など⁶⁾。

BE が 850 という極端なほど少数の語で、しかも適用範囲が広いのはひとえに英語の分析性という特質によると言われている⁷⁾。BE にするには一語をそのまま同義語に置き換えられないので、分解して語の結合、記述で表す。そのためには何を言おうとしているか元の意味をよく考えなくてはならない。またその結果一語ではあいまいの意味もはっきりするし、またいくつかの表現も可能になる。より具体的にとレベルを変えて表すので vertical translation とも言われる。結果的に simple で clear な表現となる。BE を学ぶことでこの英語の分析性という特質を知り、また日本人には苦手なこれら動詞の分析的表現に親しくなれるのはすばらしいことだ。

上の②の用法で見たように、英語では動詞がそのままの形で名詞に転換された語が多い、drink, jump, look, run walk など主に動作を表す（語尾がついた派生名詞では adjustment, discussion など動作以外の語が多い）。動詞からの転換名詞は、活用語尾のある他の言語ではほとんど見られず、これもやはり英語の大きな特徴でもある。BE ではこのような動作名詞がかかなり**沢山**ある。そのおかげで上記②のような用法、またそれらに -ed, -ing をつけて They are attacked. He is sleeping. など形容詞としてだが幅広く動作を表すことができる。これも

Ogden がこの英語の特性をよく知って巧みに利用したおかげである。

(2) root sense から意味の派生

よく使われる語ほど多義（辞書で take の意味は約 40, on は 37 と多い）だが、どれが一番元の意味だろうか。現在、英語の辞書では意味の項目はほとんど類度順に出てくる。BE ではそこから他の意味にスムーズに派生する意味を root sense 根源的意味としてそれを基にしている。名詞は比較的目に見える具体物、動詞は身体動作、前置詞・副詞は位置や動きの方向と分かりやすいはっきりした意味が root となっている。(4) のメタファーもこの元の意味を理解していればそこからの類推で理解は容易だ。特に動詞、方位詞は意味が広いのでこれは大切である。一般の英語学習では基本的動詞も訳語で put を「置く」ととらえるがそれでは狭い意味にしか使えない。on も「上」と覚えがちだが、「接触している」という root sense をしっかり身につけること大切である。中学の英語教科書で put のようなごく基本的な語が root sense とは関係ない用法から現れるのは残念なことだ。語の意味だけでなく、BE では全て最も必要な simple で具体的ことから始まり、それを基盤に複雑な難しいことへ進むようになっている。また general から special へ、regular から idiom へとすべて有機的な段階を踏んで進む。これは学習上非常に大切なことである。

(3) fiction (虚構)

fiction とは belief, power, respect など現実には存在しない心の中だけの、ことばの上での作り物いわゆる抽象物を指す。ことばとして使い方は実体を指す語と同じなので、つい何か対象物があるかのように考えられがちだ。Ogden はそこから思想の混乱も招きがちと注意を促している。具体物なら誰でもはっきり分かるが、fiction の場合指すものは各人の心の中にあるため解釈にもゆれ幅があり、食い違いが起こることもある。同じ fiction でも justice, truth などは fiction の程度は高いが、heat, redness などは flame, apple と具体的実在物との関わりを示すことで明らかになるので程度は低いと言われる。これからも fiction のことばはより実体に近い具体的ことばで言い換えられることが分かる。BE ではこの抽象的 fiction に注意を促し、apprehension を fear of the future などと出来るだけ実体に近い言い方をする。

Bentham の fiction 理論⁸⁾に Ogden は大変興味を持ったが、特に動詞は fiction の最たるもの、複雑な概念が詰まっていたウナギのように捉えにくくあいまいな思考をもたらすという彼の主張に大きな影響を受けた。Ogden はここから一般の動詞を排除すること (No verbs) を思い付き、結果的に BE が可能になった。BE では一般の動詞は (1) のように身体動作と空間内の方向や対象を表す語などで言い表すことが多い。

fiction は実際の言語活動に不可欠だし、メタファーとして意味の拡大に活躍しているものも多い。ただそれに対する態度を考え直さなくてはならないと注意している。一般的にも日常言語の多くにこの fiction は使われているが、言語学関係ではこれはあまり取り上げられてない。BE は fiction, 言語の虚構性について気をつけるよう教えてくれている。

(4) metaphor

比喩については古くから取り上げられてきたが、修辞法、つまりことばの飾り物としてとら

えられてきた。実際には日常のことばの中に比喩はそれと気づかずよく使われている。key to the door が key to the question に、野原の field が field of science で科学の一分野となるように。動詞も see が「分かる」となり、He went to Osaka から He went to his death に、put the key in the box から put one's heart in the work (仕事に情熱を注ぐ) など、上記 (1) ②の用法も動詞が比喩的に意味の広がったものである。前置詞も in the room から in comfort / danger / love などと状態を空間と見たてたものだ。fiction である抽象的な把握しにくいことをより身近な具体的なことばで表すので分かりやすい。

これも言語の働きの基本原理の一つで、2つのものの類似を見抜く人の想像力によるものである。有限な語で多くの事象が表せるのだから、語数の少ない BE ではこれは大変有用である。Ogden は徹底して metaphor の目録を作りそれらを分析して BE に採用したと言っている。つまり BE には比喩に使われるような語が多く、これを上手に利用して語の意味を広げている。このように比喩が日常言語の至るところで使用されていること、私たちの概念体系そのものだという事は 1980 年代初め認知言語学が唱え出したことである。Ogden はそれらより 60 年以上も前に metaphor を取り上げ BE にうまく利用したのだから、その先見の明に感嘆する。

(5) opposition

Ogden は 1932 年 *Opposition*⁹⁾ という題名の本を出している。この本については後で詳しく述べるが、この考えは BE に深くかかわっている。先ず語表の qualities 形容詞 150 語のうち 50 が opposites として語表のいずれかに反意語のあるものが別欄にまとめてある、学習の便利のためとしてだが。BE では形容詞だけでなく、動詞も 16 のうち 10 語が (go - come, get - give, put - take, keep - let, be - seem), 方位詞も半分は反意語、対になっている (from - to, before - after, on - off, up - down, under - over, in - out)。反意語ははっきりしていて意味を理解するには大変有効だし、また語彙節約にもなっている、inferior は not so good, lazy は not hard-working, shallow は not deep, ugly は unpleasing などで表せる。

Ogden はこの本で反意語を cut と scale に分けている。cut は right - left, top - bottom, first - last, before - after などはっきり区分できるもの、動詞の対は come - go, give - get, put - take など、方位詞 on - off, in - out などほとんどここに入る (up - down は例外)。scale は long - short, hard - soft, simple - hard, up - down など程度のある対である。open - shut は対の各々が異なる。shut は cut だが、open は a little / widely open と言えるように scale である。bent - straight も a little bent と言えるから同じだろう。いずれにしても英語習得にこの概念は有用だし、cut と scale との分類も面白い。

opposition は反意語という語の組み合わせだけでなく、2分した「対立」、「対比」という意味でも広く使われる。言語そのものにソシユールの共時と通時などを初め、動詞の自動詞と他動詞、能動態と受動態、名詞の単複、countable と uncountable、定と不定など「対立」による 2 分法は多く見られる。BE の構想自体にもこの対立はいくつかあるのでそれらを見てみよう。

① 850 語／その他の語

先ず英語の語彙の中から 850 語を取り出して他と区分したこと。Ogden は語彙の数は無数に近いけれど、それらを表す要素的な概念、ことばはごく少ないことに気付いた。BE の 850

語は英語の定義や説明に使われ、無数の語の代用が出来るような働きの大きな語である。それらは英悟の中の不可欠な核とも言える語群でもある。さらに普通英語に進むのにもこれらが基礎となって新しい語が提示される。分析的言語で大切なのは語の数ではなく語をどう理解しているか質の問題で、少ない語でも十分に把握することが大切と言われている。語数が少なければ、文脈や語結合で働く語の意味の違いに意識が鋭くなる。この 850 語は他の簡易英語の何千語などとは異なり、有機的に組織化された体系である。このような list を作るのは並大抵のことではないと思われる。

② operations / その他の語

BE の語表で operations はその他の名詞や形容詞とはっきり区分されている。この対立は一般的には機能語と内容語に相当する。ただ BE では 16 の動詞がここに入っている点が異なる(理由は③で)。operations には動詞の他に前置詞、接続詞など入っているが、名詞や形容詞など内容を表す語を関係づけ、操作して文を構築する働きを主とする。これらがないと文は成立しないし、学習上も最も難しい。これらを区別して特に operations に注意を促し、その使い方をしっかり習得させることは文形成上も極めて大事である。この区分は BE の基盤となる理論の核心でもある。BE そのものは非難しても、この区分は高く評価した学者も多い。

*Natural Grammar*¹⁰⁾ という本がある。題名から文法書と思われるが、文法らしい説明はない。副題に The keywords of English and how they work とあるように、英語の中から最もよく使われる 200 語を取り上げ、その使われ方やその型を提示している。それらが英語の最も重要な文法構造だと言う。ここには BE の operations 100 語のほとんどと like, mean, think, want などの動詞、place, sort, thing, way などの名詞が加わっている。little words でつい見過ごされがちだが、英語の主な型は基本的なこれらの語で表されているから、これらの使い方をしっかり身につければ英語の文法は習得できると主張している。BE で operations の使い方をしっかり学ぶことがいかに大切かをこの本も実証している。

③ 基本的動詞 / その他一般の動詞

動詞と言えば一般には全て一括して扱われているが、実はほんの一握りの基本的動詞は他とはひどく異なり、しかも驚くほど大きな働きをしている。不思議なことに、この事実は学習者だけでなく英語教師でさえあまり気づいていない。BE の動詞は一般の動詞と違い他の語を関係づけ文を作る働きが大きいので機能語として operations に入っている。一般的に言う基本動詞もほとんど BE の動詞と重なる。特に key acts といわれる 10 語は人の身体を使った単純な基本的動作のみを表す。super verb とも言われるこれら動詞はこれ以上分解できない最も基本的な要素で、日常生活の中で最もよく使われ、普通英語でも不可欠な動詞群である。

その他の一般の動詞は速記記号のようだとされるように、単純な動作の他に対象物とか動きの方向などの要素が組み込まれ圧縮されている。そこで (1) の例のように一般の動詞は分解して少数の基本的動詞とその他の語の組み合わせで表せる。一般の動詞を削除し、動詞の数を徹底して減らしたことが BE を可能にしたし、文の構成ルールを簡潔にした。また最も重要なごくわずかな動詞はどの文にも繰り返し出てくるので用法も完全に身につけていく。これは BE の中でもとても重要な原理であり、BE でこれらの基本的動詞に慣れ、十分に使いこなせるようにすることはとても有用なことだ。一般の人たちに BE の話をする時、英語教師でも英語の基本的動詞がそんなに広く使えることはそれまで知らなかったとの反応が多い。

Ogden は BE の理論的背景としてこれほど徹底した語彙削減の出来た主な原理を 5 つあげている¹¹⁾。一般動詞の削除, それらを 10 の主な動詞と 20 の方位詞で代用, 組織的定義図 (dog を中心に puppy, bitch などをおいて), 喚情的形容詞の客体化, fiction 理論を発展させて metaphor の扱いに。

④ fiction／実体

これについては fiction の部で解説した。この区別を意識しておくことは重要である。

⑤ 指示的用法／喚情的用法

この区別は『意味の意味』でも重視しているが, 外界の状況から真偽が確かめられるような事実を指示することばの用法と, 話し手の態度, 感情を表す使い方を混同しないように注意している。言語の働きの第一は指示であり, 読む人聞く人にはっきり情報を伝えることが大事だ。しかし情報を伝えていると思っても何らかの感情で色づけされていることはよくあるので気をつけなければいけない。特にマスコミ情報, 誇大広告, それに権威者側のことばはこれを巧みに利用して人々の考えを操ることが多いので注意が必要である。戦時中政府, 軍部は「ことばによる扇動」で政策を正当化, 民意を動かしてきた。

確かにこの区別は厳密には出来ないが, BE は事実をはっきり認識することばであり, 情緒的なことばは出来るだけ避けるようになっていく。例えば lust を strong desire of sex, sublime を very beautiful, ugly を far from beautiful などとすれば感情的含みは薄らぐ。③の最後にあげた感情的形容詞の客体化はこれを指す。fine, nice, wonderful など何にでも使えてとても便利な語だが, ただ「好い」という感覚だけで, 明確な意味は何も伝えていない。この喚情的色合いを注意する事は大切だし, 事実, 情報を伝えるのに出来るだけ BE のような平易で事実的なことばを使いたい。

Richards は Ogden の opposition の考えを高く評価し, ことばは必要なものとそれ以外のものの排除で成り立つと言い, opposition を言語使用における key role とした。さらにこの考えを英語教育に展開し GDM でそのテキスト構成に大きく活用した。自分たちの目指している教え方を 'a planned serial ordering of opposition in sentences and situations'¹²⁾ とした。English through Pictures を見ればわかるように I - You から始まって here - there, this - that, そして男女, 否定肯定, 特定不特定と, また文全体, 発音なども対比を大々的に活用している。A ball is in the box. と A ball is on the box. のように Sen-Sit, 文と場面のセットがうまく対比して提示される。この対比のおかげで direct method が可能だと言われるように, これは学習者にとって非常に分かりやすい。

(6) ことばと身体

それまで人や経験から離れた抽象的, 客観的な意味を扱っていた西欧哲学に対して, 認知言語学ではことばは人間とは切り離せず, 人の心の働きから生じる概念, ことばも人の身体と深く関わると考えた。1980 年代ことばは身体的経験に由来し, それとの関係で意味を生み出すとして想像力の主要な働きが唱えられた。Johnson¹³⁾ も私たちの体を動かしての経験がいかに抽象的意味や推論に重要かを論じている。まさに BE の考えと共通している。このような考えが明らかにされる 50 年以上も前に Ogden は同じようにどんなことばの意味も人の身体の動き

や手指での操作、及びその metaphor として解釈されると考えた。ことばが身体と関わっているのはどの言語でも共通だが BE ではこの特質がさらに推し進められている。BE でそれがどう反映されているか、実際にどのようにことばと身体が深く関わっているか見てみよう。

① BE の語彙

最初にあげた BE の 4 つの語群からも分かるように、物を指し示すことばは手や目の代わり、基本的動作は人の身体を使っての動き、また方向や位置も自分の体を起点として明らかになる。key acts を表す動詞 going, giving, putting, taking などは人間の誰でも一番よく知っている単純な動作、筋肉の調節運動で最も確実なもので、これらに比べるとどんなことも不確実だと Richards は言う¹⁴⁾。そしてこれら一握りの動詞が BE の文形成の要、文の述部の中心となっている。つまり BE の文のほとんどの述部は身体行為を指すことばから成っている。またそれらとよく結びつく方位詞も空間内での位置や方向はほとんどが自分の体を中心に、実際に目で見て分かるようなものである。

② metaphor

身体を基とする意味論では想像力が重要な働きをする。そして比喩表現はこの想像力の産物である。上に述べた手や目で指し示される具体的物や体を動かしての動作は人の想像力によって比喩的に意味は広がる。BE では私たちに最もなじみのある身体部位の名前が形、位置や機能などの類似から比喩的に広がって行く。head of a bed / pin / school / town, mouth of a bottle / river, foot of a page / mountain など。

また身体を使っての動作から精神的な意味に広がっていく。see, have a grip of (on) は見たり握ったりすることから「分かる」に、また BE の多くの動詞は身体の空間移動から I didn't go into details. The idea came to my mind など、また何かを操作して位置移動させることから put an end to the discussion などにと。また身体動作を表す名詞が give a blow (打撃) / a push (やる気), make a slip (誤り), be in touch (接触, 連絡) with などに。(1) ②の「動詞+名詞」も身体を使って何かを実際に与えたり作ったりする動作から give an answer / comfort / trouble や make a decision / protest などと比喩で広がったものだ。身体動作を表す BE の動詞はこのように大幅に使い道が広がっていく。形容詞も人の身体感覚を表す表現から bright outlook (有望な見通し), rough man (荒々しい男), smooth way of talking, sweet girl, warm love などと、また a gripping / moving / touching story などは握ったり、動いたり、触ったりする身体の具体的な動作から「感動的な」という意味に広がる。

③ opposition

これも空間上の対立で私たちの体が基準になっている、つまり身体の左右対称自体が opposition の象徴化であると Ogden は説明している。cut は身体が垂直の軸になってその両端が対立し、right - left がその代表である。水平線で見ると身体の前後で before - after, future - after, front - back と対立。身体の上下で連続体としては up - down が、scale の両極端は人の頭と足が top - bottom となっている。

(7) 文脈

『意味の意味』の三角形でも示されているように、ことばと物自体は直接結びつかず、ことばを使う人の考えや言語を取り巻く状況などを通してことばは初めて意味を持つと Ogden

Richards は主張している。ことばには辞書的な意味はあるが、実際にはそれが使われる前後の部分、発話全体の可能な解釈から意味は明らかになる。

BE でとりわけ文脈が大切なのは、語数が少ないため意味がふえるからだ。特によく使われる operations の意味は一般的で解釈の範囲が広い。日本語や普通英語から BE にするにも一対一で同義語には置き換えられず、別のレベルのより具体的な語やその組み合わせで表すので、文脈をよく考えなくてはならない。しかし日本人は一般に英語と一対一の訳語で対応させてしまう、「proper meaning 迷信」と言われる語に意味を固定する誤りである。BE は私たちに文の解釈、表現に文脈をよく考えることを教えてくれる。

注

- 1) Globish はフランス人 P. Nerriere によって 1989 年に提唱された簡易英語、国際共通語。1500 語は VOA の Special words から多くを取っている。関係節、受動態、イディオム、比喩、句動詞など出来るだけ使わず文法も易しく、文も短くとしている。
- 2) 9) の *Opposition* (改定版) に Richards は序文を書きこれを高く評価した中で。
- 3) Richards, I. A. (1937) "Basic English in the Study of Interpretation" in *Psych XVII* pp.35-40
- 4) これはこの用法を専門的に取り扱った初めての本で、その後この用法も大学院の論文などの研究題目に取り上げられることが多くなった。
- 5) 相沢佳子「ベーシック英語の動詞制限について—他の言語と比較して」
研究紀要ベーシックイングリッシュ協会 (2003) 11 pp. 1-7
- 6) 卷下吉夫 (1980) 『日本語から見た英語表現』研究社
相沢佳子 (2013) 『850 語で英語を表現しよう』(文芸社) p.142 に掲載
- 7) Richards, I. A. (1935) *Basic in Teaching: East and West*. London: Kegan Paul. p.70
- 8) Ogden, C. K. (1932) *Bentham's Theory of Fiction*. London: Kegan Paul.
Ogden は 100 年も前の Bentham の原稿を発掘し、その中から彼の考えをまとめ、それに本文の長さと同じほどの序文を書いて出版した。
- 9) Ogden, C. K. (1939) *Opposition: A Linguistic and Psychological Analysis*. London: Kegan Paul.
- 10) Thornbury, S. (2004) *Natural Grammar*. London: OUP.
彼は他にも、'Big Words Small Grammar' *English Teaching Professional* 31 の論文でも文法の抽象的規則の代わりに core となる語から始めるべきと主張している。
- 11) Ogden, C. K. (1930, '44) *Basic English*. London: Kegan Paul. p.19
- 12) Richards, I. A. (1968) *So Much Nearer*. New York: Harcourt, Brace & World p.68
- 13) Johnson, M. (1987) *The Body in Mind*. Chicago: Univ. of Chicago Press
- 14) Richards, I. A. 3) (1937) 3) と同じ p.40

2. a / the の教え方について最近考えていること

唐木田 照 代

the をいつどういう風に教えるのが良いのかなかなか「これだ！」といえないで過ごしてきた。月例会やその他の勉強会でデモがされたり話し合いがされたりしてきている。教える生徒にもよるし、教師の考え方にもよるところである。

EP 1 で the が初めて出るのは p.10 This is a hand.

This is a hand.

This is the thumb.

These are the fingers.

This is the thumb.



These are the fingers.

私が GDM を始めたばかりの時に吉沢先生から教えていただいたのはこの段階で the は難しいからここは飛ばして先に進め、in / on を教えるときに the を教え (p.13) ここへ戻ればよいということだったと覚えている。以来私はずっとそのやり方できたのだが数年前からやはり EP で出る順番どうりやったほうが良いという波が起こり、私もそうかなと、やってみた。

p.10 の段階では使える言葉がまだとても少なくここで This is a hand の絵を使い a hand / the thumb / the fingers を教えても生徒たちが自分で使えるようになるのかなという思いが残った。

今年の春のセミナーで Brian Small さんが、a / the のデモをされた。Small さんは宮崎の大学で英語にあまり関心を持ってくれないたくさんの方の大学生にあの手この手を使い GDM で英語を教えている。This is my / your / his / her hand. とライブでコントラストして This is a hand. を導入。a hand に使ったのは作り物の手で中に綿か何かやわらかいものが入っているとされるもの。それをさわって the thumb / a finger / fingers / the fingers を練習。その後等に等身大マネキン人形の a leg を使い This is a leg. (foot の部分を指し) This is the foot. を導入。a leg はいろいろな大きさの人形やキュウピーの a leg が生徒たちのところに飛んできて This is a leg. This is the foot. foot を取りはずと This is a foot. など練習。その後いろいろな大きさ素材の an eye / an ear が生徒のところに飛んできて生徒は大騒ぎ先生は大奮闘だった。マネキンの足を使った This is a leg. This is the foot. はわかりやすかったがこの段階では EP には leg / eye / ear という言葉はまだ出てこないのどこまで教えるか、作り物の体の部分が登場するとクラスは大騒ぎという問題もある。

EP で次に the が出るのは

p.13 That is your hat. It is on the table.

p.23 This is water. This is a bottle. The bottle is in a man's hand.

This is a glass. It is on the table.

Now the glass is off the table.

The glass and the water are on the floor. (不可算名詞 water に the)

p.26 This is a room.

These are the windows.

(旧バージョンではここは These are windows. 次のコマで These are the windows of the room. 私はこちらの方が良いと思う)

This is a door. This is a picture.

This is a door. This is the floor of the room.

p.27 This is a wall of the room. A picture is on this wall.

This is a wall. This is the floor of the room.

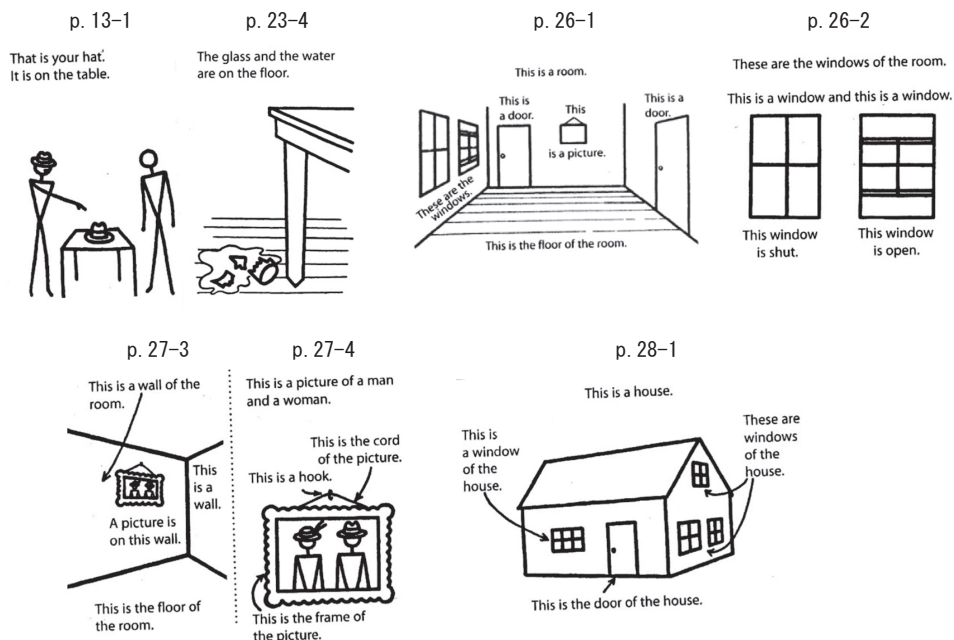
This is a picture of a man and a woman.

This is the cord of the picture. This is a hook.

This is the frame of the picture.

p.28 This is a house. This is a window of the house.

These are windows of the house. This is the door of the house.



こういう風に進んで a が the に変わっていくのが大変細かく graded に準備されている。

今小学校6年生を教えるが、EPの順番どおり p.10 で a hand /the thumb / the fingers を教え、みんな分かったかな～と思いながら p.13 をとおり、pp.26-27 へきてテーブルや椅子の leg を使いながら a leg / legs / the leg / the legs など練習しこのあたりで子供たちが正しく使えるようになり、その頃私が京都セミナーに参加し帰ってきてから復習しながら p.10 の絵を見せたところ当たり前のように正しい文を言った。Brian さんのデモに参加した後で p.10 の抽象的な hand の絵をもう一度見せてみようと思ったのだ。

初心に戻り p.10 ではふれずに進んでから戻ってくるのがいいのか、生徒たちが本当にはわからなくてもちょっとはふれて前に進んでいくのがいいのか次のクラスの時にはどうしようかとまだ悩んでいるところだ。

3. Learning Basic English at Monthly Meeting

Asada Akie

At monthly meetings of GDM West group we have time for learning Basic English. GDM teaching is based on Basic English. So getting knowledge of the 850 words of Basic English and their uses are of great help to teachers of GDM. In the past we had time for reading quite a number of books on Basic English and had time for talking in Basic English. But putting all the 850 words and their uses in our head seemed to be hard work needing much time.

At one meeting Mr. Katagiri Yuzuru said, "Is learning Basic English hard to you?" Some of us were moving our heads up and down as a sign of saying "yes". He went on saying, "Let's make it simple and become friends with Basic English." "Why don't we go to a Basic restaurant?" "A Basic restaurant?" At first all of us had a troubled look on our faces. Slowly step by step what he was saying was getting clear to us. "We have apple, cake, cheese....." Another person said, "There are egg, fish, potato, butter, milk...." Everybody was taking a good look at the Basic Word List. We said one after another on the list with a smile on our faces. Learning Basic English came to be an amusement to all of us. "How about going to a clothing store? What do we have at school?" I was picturing other ideas to myself.

At another meeting Yuzuru said, "On Basic Word List there are some words used in the Japanese language as "Katakana words" such as "rule (ルール)", "corner (コーナー)". "Katakana" is the square form of the Japanese sound-signs used for writing words from other languages. Do you see some of them on the list?" We had a good look at the list from the top to the lowest part with great care. It is surprising for us to see such a great number of Basic words are used in the Japanese language as Katakana words. Let me give more of such words, "condition, control, copy, credit, family, light, order, jump, shock, camera, curtain, engine, garden" I say a number of words one after another, "account, hard, soft, error....." With the development of computers (electric machines for getting news and ideas or sending words to other persons or doing number work) more and more words on the Basic list will be used in the Japanese language.

Not only looking at the list but viewing it from different points, learning Basic English seems to be more like play than hard work.

4. 今、中学校の授業に求められていること

松浦克己

1 はじめに

「正確な文法理解が高得点の鍵」これは今年の愛知県公立高校の入試問題について、ある大手進学塾がホームページで公開している分析の見出しです。ここからどういうことが入試対策として起こると予想されるのでしょうか。文法指導の説明の時間がさらに多くなり、理解できているかを確認する単文形式のドリル練習を授業内でひたすらおこなう、といったことが容易に考えられます。こうなると推測する理由は、文法理解は文法用語を使って説明しないと分かるようにはならないという思い込みが多くの人たち、特に教師の多くにあるからです。また、そのような授業と自分の努力によって英語が分かるようになり、好きになってきたというのが多くの教師の経験だからです。この経験が生徒の多くにあてはまるものであれば問題はないのですが、そうでないのは誰もが分かっている。あるいはその現実と直面し、多くの真面目な教師は悩んでいるが、有効な対策が見当たらないという状況だと思われます。「正確な文法理解…」という分析自体は間違っているわけではなく、言葉を習得していくうえで、あたりまえの内容です。問題はどのようにしてその理解に到達させるかということです。

2 学習指導要領では

平成20年度に改訂された現行の学習指導要領…文科省が教科の目標や内容を定めたもので、教育課程（カリキュラム）を編成するときの基準となるもの。およそ10年ごとに改訂され、これに基づいて教科書が編纂されている…やその解説書では、上記のような「文法理解」についてどのように扱われているか確認してみたい。文法について次のような説明がある。

文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、コミュニケーションを実際に行う言語活動と効果的に関連付けて指導することが重要であることを今回の改訂で新たに示したものである。したがって、文法事項を指導する際には、その意味や機能を十分に理解させた上で、それまでに学んだ語彙や文法事項と関連を図り、言語活動の中で自分の考えや気持ち、事実などを伝え合うことに生かすことが大切である（解説書 p.56）。

また、文法事項の取り扱いについては次のように説明してある。

限られた学習時間を有効に活用するため、文法事項の指導に当たっては、文法用語の解説や用法の区別などに深入りしないように留意するとともに、実際に活用できるようにすることを目指すことが重要である（解説書 p.57）。

56ページの説明でのポイントは「言語活動と関連付けて」であり、57ページでは「文法用語の解説に深入りせず、実際に活用できる」とより具体的に述べている。これを実際の授業の様子で表せば、文法用語を使って文法の説明で導入することは有効ではないのでやめなさい。現実の場面で、事実に関する情報のやりとりをしていく中で、単語や文の使い分け・ルールを理解していくような活動を大切にしながら。生徒が説明を聞く時間よりも、実際にその言葉を使って相手に情報を伝えたり、相手から聞いたりする時間を増やし、その内容を充実させなさい。文法用語の使用は必要最低限にとどめ、意味や使い方が十分に分かり、使えるようになっ

てからまとめとして使うようにしなさい。こういうことになると考えられる。

この授業の様子は、GDMのライブの様子を説明する文に使ってもなんら問題のないものである（最後の文法用語の使用は…という1文はGDMでは行っていないが、教科書を使わなければいけない中学校の授業としては、仕方のないことと考えていかなければならない）。1950年前後に日本に紹介されたGDMの教え方の根幹をなす部分が、50年以上たった平成20年に改訂された学習指導要領や解説書で「新しく」示されたことになる。GDMの考え方に基づいた授業が今求められていると言える。

解説書38ページには、授業や教科書の編集に対して次のように注意をしている。

「文法事項」については、従来の学習指導要領で用いられてきた「文型」に替えて「文構造」という言葉を用いた。文を「文型」という型によって分類するような指導に陥らないように配慮し、また、文の構造自体に目を向けることを意図してより広い意味としての文構造を用いたものである。

これもGDMの考え方と一致している。ベーシックの語表の右下に文型の基本として次の文が出ている。We give simple rules to you now. これに関しては、相沢佳子さんの「英語を850語で使えるようにしましょう」のp.130からp.133に詳しく説明されている¹⁾。

私はGDMを取り入れた授業を公立の中学校で20数年実施してきました。英語の文の学習をIt is here / there. で始めた学習者はその後、数ヶ月たって教科書の基本文 Math is interesting. (平成27年度のNew HorizonではUnit 4での新出)を新しい文型との認識はなく、なんとなく理解していくことを見てきました。また、新しく教える必要性を感じたことはなく、GDMの有効なことのひとつと実感してきました。このことは相沢さん本の中で次のように説明されています。「be…存在を表す。A be Yという形で、He is there / in Osaka. のように、AはYという空間内にあることを示す。他の用法も全てこの根源的意味が広がったと考えられる。次にHe is a teacher. などの連結の意味を表すが、これも教師という領域内に存在する、またHe is happy. も幸せという状態の中にとれる。」この説明の授業における事例が、上記の私の生徒です²⁾。

New Horizon 3年では、5文型のなかの第何文型なのかを問う問題が3年間のまとめとして出されているが、これがいかに無駄なものか、今回の学習指導要領や解説書の内容や、GDMで学習した生徒の様子からも明らかである。

3 耐震補強の外枠

外壁にXの形をした枠組みを付け加えた校舎をよく見かけるようになりました。古くなった校舎が現在の耐震基準を満たしておらず、また建て替えることもできないために行われている耐震工事です。学習指導要領もほぼ10年ごとの改訂なので、校舎と同じように十分にその意図が伝わっていないときには補強する必要性が出てきます。現行の学習指導要領が求めている文法指導の変革がなかなか進まないの、補強するものとして出されたのが「英語で授業を」です。学習指導要領の言葉は授業の進め方を直接的に表しているものではない（毎日忙しい教師にとって、直接的に言っていない学習指導要領やその解説書はあまり読まないし、私も退職してから初めてこの部分を読みました）ので、まさしくそのままの言葉で授業改善を求めたものが「英語で授業を」です。しかし直接的であるが故に、今まで日本語で話していた文法の説

明を英訳して行う授業とか、文の意味や機能の重要性を無視して、買い物やレストランの場面などの英会話練習と教師が指示を英語で言う授業、といった誤解が大きく取り上げられました。

ほんとうのねらいは、学習者が自分のこととして実際のことに関する情報交換（すなわちコミュニケーション）を行っていく活動をさせなさい、ということです。GDMのライブの活動が、このねらいそのものであることは明らかです。That is her bag. It is on that table. My bag is on this table. と自分の立場で周りの人と事実の情報交換をする活動をとおして、その語句や文の意味・用法を理解させていくGDMの教授法が、今求められている授業を創っていくのにとっても参考になる。

4 さらに

英語科だけでなくどの教科に対しても「アクティブ・ラーニング」の授業が求められている。アクティブ・ラーニングはあるひとつの教授法の名前ではない。授業を創っていくうえでの基本的な考え方であり、非常に多様な授業方法があるので、アクティブ・ラーニングの内容を簡潔に表している次の4つの言葉で見えていくのが有効である。それは、①課題発見 ②主体的 ③協同的 ④課題解決の4つである。これがアクティブ・ラーニングの必要条件と考えられる。授業改善の視点としてこの4点はとても有効なものであるといえる。文法用語を使った説明の導入では、最初の課題発見の条件をどうていクリアーすることはできない。発見ではなく、課題押しつけである。また、主体的にということは、意欲的にと密接にかかわっている。意欲ということが、平成元年改訂の学習指導要領ではじめて大きく取り上げられ、通知表や指導要録の観点の変更をはじめとしていろいろな対策が取られてきた。しかし、当然のことながら特効薬があるわけではなく、依然としてなかなか難しい課題である。GDMの特徴のひとつである「説明をしない」という授業スタイルは、必然的にそこからいろいろなことが授業の特徴として出てくるが、アクティブ・ラーニングの要件にあうものばかりである。それは学習者の感想やふりかえりを読むと明らかであり、自ら学ぼうとする姿勢を育てるGDMの特徴がよく表れている。

5 GDMの意義

このように見てくると、現行の学習指導要領、「英語で授業を」そしてアクティブ・ラーニング、すなわち、文部科学省が今求めている授業にもっとも合致している教え方のひとつがGDMであることは間違いない。しかし中学校の授業にGDMを取り入れるハードルは低くない。他の指導法よりもかなり高いということも事実である。この高いハードルの具体的な内容については今回は触れないが、ハードルを完全になくしてからでないことと取り入れることができないというわけではない。解消できたところから、ひとつずついろいろな方法で取り入れ、生徒の変容を確かめながら一歩ずつ進めていき、その実践を共有し、より効果的な指導法を求めていくことが大切である

注

- 1) 相沢佳子著「英語を850語で使えるようにしよう」
- 2) 「英語を850語で使えるようにしよう」p.69

5. 「言いたいこと」と英語力の間 ～Writing Workshop と GDM～

吉 沢 郁 生

ライティング授業の苦痛

この数年間、高校生にライティングの授業をしてきた。検定教科書は、まずはセンテンスを組み立てる力をつけるために、文法や文型を教えるように作られている。それが済むと、文法や文型の知識を使って、ある分量の文章を書かせるように構成されている。しかし、いざテーマを与えて書かせてみても、生徒たちはなかなか思うように書けない。ここで私は次のような苦痛を感じる。

- (1) 与えるテーマ（大学入試問題も含めて）が面白くない。「大学に入ってやりたいこと」「好きなスポーツについて」などについて書かせても、ありきたりの内容しか出てこない。
- (2) 生徒が言いたいことに英語力が追いついていない。エラーが多い。教師はそれを添削することになる。クラスサイズが大きいと添削は大変な作業になる。
- (3) 添削して返却してもそれが英語力の向上になかなかつながらない。
- (4) その結果、生徒たちは英語を書くことが好きにならない。

これは私だけの体験ではないだろう。例えば、影山陽子氏（日本女子体育大学）は次のように言う¹⁾。

筆者が作文教育に関わり始めたのは、今から約 17 年前の日本語学校の教員時代であった。その頃、作文の授業は苦痛であった。書くという苦役を学習者に課し、書きあがった物に対して、添削という多大なエネルギーを使うものの、それが有効に活用されている様子は見られなかった。時に、添削によって学習者を傷付け、あるいは、添削したものがそのままゴミ箱に直行することさえあった。

Writing Workshop との出会い

このような苦痛を味わう中で出会ったのがライティング・ワークショップ（Writing Workshop, 以下 WW）というアプローチである。ドナルド・グレイブズ（Donald Graves, 1930–2010）によって提唱されたこの作文教育の手法は、1980 年代以降、米国、英国、オーストラリア等の国々に普及した。特に米国にはこの WW の実践者がたくさんいる。日本へは 1990 年代に紹介されたが、あまり普及していなかった。近年、WW の実践例が現れてきたが、その多くは小学校や、中学・高校の国語の授業での実践である。

ライティング・ワークショップは次のような特徴を持つ。

- (1) 自分の書きたいことは自分で選び取り決定する。
- (2) 題材をさがし、下書きをし、修正・校正をし、清書するプロセスを体験させる。
- (3) 教師は、そのプロセスにおいて生徒に個別につきあう（「カンファレンス」と呼ばれる）。
- (4) 書いた作品は生徒の間で共有される。

授業は次のような時間配分で行なわれる（1コマ60分の場合）²⁾。

ミニ・レッスン（5～10分）	……	特定の内容に絞って短時間で全体に教える時間。 （授業の進め方に関する事、書くプロセスに関する事、表現手法に関する事、校正のスキルなど）
書く時間（35～45分）	……	生徒が自分のテーマに添って書く時間。教師は個別に生徒とカンファレンスをする。
共有する時間（10～20分）	……	生徒の作品をクラス全体で共有する時間。

この手法を小学校の作文教育で実践して、子どもたちが「書く」ことが好きになった、夢中になって書くようになったという報告がされている³⁾。

それに触発されて、外国語教育（日本における英語教育）の授業に応用しようとする動きがある。私もその動きに関わる一人である。ここでは、WWの特徴（1）に絞って、GDMの側面から考察する。

オーナーシップ

特徴（1）は従来のライティングの方法論と対極にある。教師の与えるテーマや言語的な条件のもとで書かせるだけでは、生徒は自分の「書きたい」という気持ちを満たすことができない。自分の書いた文章をかけがえのない自分の作品であるという、オーナーシップの感覚を持つことができない。WWでは、書く内容を自分で選び取り決定することで、自分の書いたものに対するオーナーシップを育てる。そして、これが生徒を自立した書き手として成長していくための重要な要素であると考えられる。

ところが、書く内容を自分で選び取り決定することができたとしても、生徒の英語力が追いつかないのが現実である。そして、「このことを言いたい」という思いが強ければ強いほど、それを表現するための英語力とのギャップも大きく感じられることになる。

従来のライティングの方法論では、そのようなギャップに対して、オーナーシップを犠牲にして、もっぱら言語的な知識を教えることに専念するか、オーナーシップを尊重して自由に書かせる代わりに、エラーを徹底的に添削するという方法で対処してきた。

「言いたいこと」と英語力のギャップをどう解決したらよいか。ギャップの小さい段階から、

自分で選び取り決定することを実践することはできないのか。

この問題について、入門期の最初の段階から、聞く・話す・読む・書くという4技能を併行して育てる Graded Direct Method (以下 GDM) の授業実践が一つの手がかりを与えてくれる。

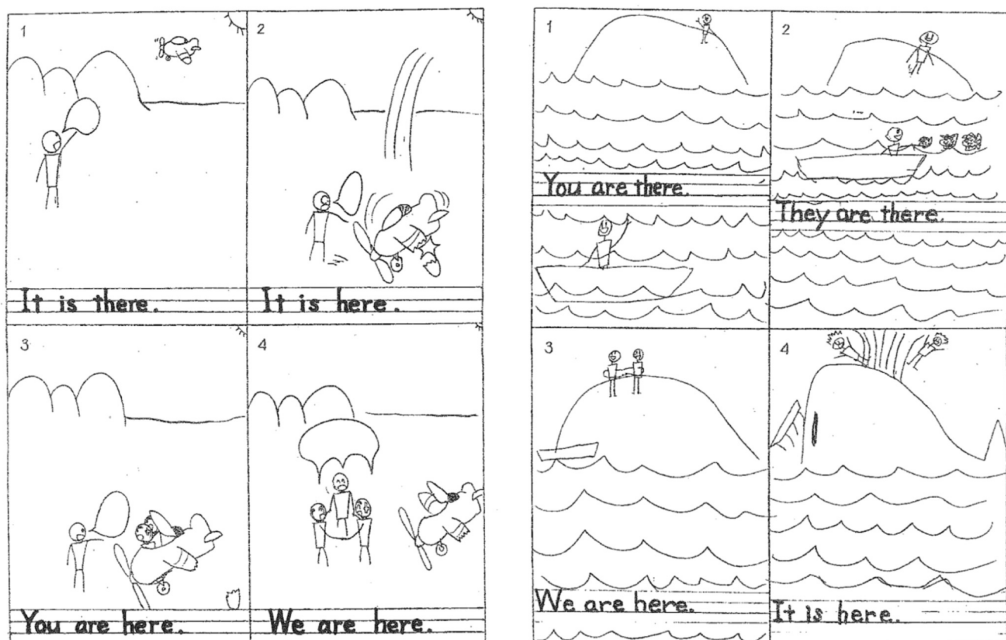
Live situation の場で

GDM では、内容を自分で選び取り決定するという局面が、まず live situation を使った oral work の中で行うことが可能である。片桐ユズル氏は次のように言う⁴⁾。

1999年3月27日名古屋での中級セミナーでわたしは “An orange is on the table. Cookies are on the plate. Cups are on the table. Hot water is in the pot. Pictures are on the board. A frame is on the table.” というような situations をつくり、あとの動作は生徒自身が決めて “I will go to the board and I will take that picture of a man and a woman off the board. And I will put the picture in the frame.” “I will go to the table, and I take a cup off the table. And I will put hot water in the cup.” などと言うようにもっていった（下線は引用者による）。

ライティングの場で

書くことについて言えば、入門期のごく初期から、内容を生徒自身に決定させることが可能である。例えば、私が GDM で中学1年生を教えた時、新学期が始まって3枚目に配ったプリントは、4コマの大きな升目の上に、「絵と英文で4コマのストーリーを作ろう。」という指示をつけただけのものだった。このプリントで次のような作品が寄せられた⁵⁾。



さらに、書いた作品を生徒どうしで共有し刺激しあうチャンスを作ることで、生徒の書く意欲はさらに高まる。例えば、近藤祐子氏は次のように言う⁶⁾。

授業が始まるのと同時に、連絡事項や練習問題をのせるつもりで、英語通信 “Hello English”（第1回目の生徒対象）“Howdy English”（第2回目の生徒対象）を発行し始めました。どちらとも、2号めあたりから、生徒がノートに絵入りでEP1の英文をうつしていたものなどを数点コピーし紹介したところ、「私もやって来ました」と自主的にノートを提出する生徒がでてきました。その子達の作品を通信にとりあげると、また新たに自主学習として、習った英文に興味深い絵をつけてノートを提出する生徒が多く現れ、いつのまにか授業が終わると10人以上の生徒達が競って教卓の上にノートを置きに集まってくるようになりました。…ラブロマンスのマンガの切り抜きを貼って、His hand is in her hands. と表現したり、アキノ大統領など時事問題を新聞の写真とともに対話形式で英文にしてきたものなど、こちらの予想をはるかに越えた生徒の思考力・応用力・発展性に驚きの連続でした。

社会人の作品

自発的に書きたいという意欲は高齢のGDM学習者にも見られる。次の作品は、GDM会員の加藤准子氏のクラスのメンバーが、EP Book 1 終了時に書いたものである⁷⁾。

I study English in “Dream A” class.

Mrs Kato is our teacher.

There are 9 persons in the class.

We have lesson on Tuesday.

It is from 1 : 15 to 2 : 45.

I leave my door at 12 : 45.

I take a bag with me.

There are the textbook, notebook, pencils and the other things in my bag.

Now, I am in my classroom.

I came here at 1 : 00.

Mrs Kato was in the room before I came here.

She has two big bags.

One of her bag is on the table.

The other bag is on the floor.

She said “Hello” to me. I said “Hello” too.

She is putting a picture on the board.

I am in my seat.

I see the door of the room.

It is open.

I see the clock. It is over the board.

The time is 1 : 10.

Iwamotosan was not in the room when I came here.

She came into the room at 1 : 05.

Yonekurasan and Hanadasan are coming through the door together.

They will put their coat on that table after they took their coat off.

Matusitasan is not here.

She will come before 1 : 15. She is walking in the street.

I am between Yatosan and Hoizumisann.

Hoizumisan is on my left side.

I have a text book in my hand.

Fujishirosan has a text book which was in her bag.

My book and her book are the same.

One person of our class is not here.

Who is coming into the room?

This is Hashimotosan who come into the room. She will take her seat soon.

Hashimotosan gave a plant me this summer.

It will have white flower next early summer.

Today we are all in the classroom.

We are happy.

この作品をどう読むか。言語的な正確さをひとまず置いておいて、書き手の目線に寄り添いながら読んでみよう。

まず、自分が加藤氏のクラスの一員であること、クラスの時間、曜日、メンバーの数などが書かれている。その後、自分は何時に来たとか、誰々さんはまだ来ていないとか、自分の席はどこだとか、今、教科書を手にしているとか、といったことが淡々と書かれている。これだけ詳しく逐一名前をあげて書かれると、後ろから2行目 We are all in the classroom. という分の“all” にちょっとした感慨を覚える。感情的な表現はなく、教室の様子が、時刻の経過とともに淡々と描写されているだけなのに、事細かな描写を通して、この英文の書き手の人柄が伝

わってくる。

自分で選び決定すること

この作品の作者は、EP Book 1 の最後まで学習したことを受けて、自分が習ったことでどんなことが書けるだろうか、と考えたに違いない。そして、授業の中での oral work を思いだし、それをもとにある日の教室の様子を書き留めたのだろう。

「自分が習ったことでどんなことが書けるだろうか」と考えるということは、言い換えれば、習ったコトバでどのように世界を切り取れるかを考えることである。

絵と英文による 4 コマのストーリーでは、生徒は習ったばかりの here, there でどのように世界を切り取れるかを考えた。しかし、教師の指示は単に「絵と英文で 4 コマのストーリーを作ってみましょう」である。どの語を使うか、その語を使ってどのように世界を切り取るかは、生徒が選び決定している。

GDM は 4 技能を併行して育てていく。習った語・文型でこんなことも言える（書ける）！という体験を第 1 時間目から積み重ねていく。それが表現の意欲の出発点となる。「言いたいこと」と英語力とのギャップが小さい。小さいから安心して使えるのである。だから、習っているコトバから離れた所で、言いたいことを刺激しないことが賢明なのである。

そして、からだを通して live situation でやりとりする活動は一つの体験として蓄積されていく。それが「言いたいこと」の源になる。

GDM 以外の授業ではこれが難しい。習ったコトバそのものが「言いたいこと」を形作るというモメントは用意されておらず、それとは別個に、書く内容の題材さがしをすることになるからである。

注

- 1) 影山 (2011)
- 2) ラルフ・フレッチャー&ジョアン・ポータルピ (2007) pp.23-26
- 3) プロジェクト・ワークショップ編 (2008)
- 4) 片桐ユズル「場面をあらわすセンテンスと場面をひらくセンテンス」Graded Direct Method Association Of Japan News Bulletin No.51, GDM 英語教授法研究会, 1999. 片桐ユズル (2014) に所収。
- 5) 吉沢郁生 (2003) p.76, p.79
- 6) 近藤祐子「英語通信は生徒の作品でいっぱいになった」in 片桐ユズル・吉沢郁生 (1999) 所収。
- 7) 加藤准子氏提供の資料による。

参考文献

- 影山陽子 (2011) 「ライティング・ワークショップの秘密— 選択理論を通してライティング・ワークショップを眺めてみる」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3号, pp.108-117
- 片桐ユズル・吉沢郁生 (1999) 『GDM 英語教授法の理論と実際』松柏社
- 片桐ユズル (2014) 『基礎英語の教え方』松柏社, 2014
- 小坂敦子 (2007) 「ライティング・ワークショップ— 外国語としての英語教育の観点から」『文明 21』18号, 愛知大学国際コミュニケーション学会

プロジェクト・ワークショップ編 (2008) 『作家の時間—『書く』ことが好きになる教え方・学び方【実践編】』新評論

吉沢美穂・東山永・升川潔 (1983) *Revised Teachers' Handbook for English Through Pictures Books I, II*, GDM Publications

吉沢郁生 (2003) 『中学生のための GDM ワークシート 2002』私家版, 2003

吉沢郁生 (2012) 「気持ちを書かせるのは難しい—GDM のライティングにおける『描写』」 *Graded Direct Method and Basic English Society of Japan Year Book*, No.64, GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会, pp.13-19

吉沢郁生 (2014) 「高校の英語授業での Writing Workshop の試み—2013 年度・高二ライティング」『甲南英語通信』24 号, 甲南高等学校・中学校, pp.12-22

ラルフ・フレッチャー&ジョアン・ポータルピ (小坂敦子・吉田新一郎訳) (2007) 『ライティング・ワークショップ—『書く』ことが好きになる教え方・学び方』新評論

Nancie Atwell (1998), *In the Middle: New Understandings About Writing, Reading, and Learning, Second Edition*, Boynton / Cook Publishers

《参考資料》以下は, 2015 年 summer seminar



6. EP as Literature and a Good Education

Brian Small

Quotes

In the quotes [Q 1] to [Q 9] I gave more **weight** to certain words for their use later, and as a shorter way of reading long statements.

1. "In any genre it may happen that **the first great example contains the whole potentiality of the genre**. It has been said that all philosophy is a footnote to **Plato**. It can be said that **all prose fiction is a variation on the theme of *Don Quixote***." Lionel Trilling
2. "Any organization which designs a system... will inevitably produce a design whose structure is a copy of the organization's communication structure... Assuming that **two men[persons] and one hundred men cannot work in the same organizational structure** ... they will not design similar systems... the value of their efforts may not even be comparable... **two men**, if they are well chosen and survive the experience **will give us a better system**." Melvin Conway
3. "Poetry cannot be discussed meaningfully unless one can **assume that everything in the poem** – every last comma and variant spelling – **is in it by the poet's specific act of choice**." John Ciardi
4. "**White space** is the space on a page that is not occupied by any text or graphics. You might call it 'blank' space. Beginners tend to be afraid of white space; professional designers "use" lots of white space." Robin Williams
5. "**literature**... books, verses, sp., sort valued as art..." C. K. Ogden
6. "... our **greatest need – teachers able to help humanity to remain humane. Literature** – a deep enough *and leisurely enough* familiarity with what the best minds have thought and felt **about people – used to produce such teachers**." I. A. Richards
7. "I am influenced more by the change in *morale*, the reconstruction almost of personality ... in the baffled student of English who suddenly finds himself able to use it... the **effects can be [like those of]...** the study of **Literature**... its peculiar benefits:
 - a steadying of **judgment**,
 - an enhancement of responsiveness and **understanding**,
 - a heightened **sympathy an self-control**
 - ... more **excellent human beings**..." I. A. Richards
8. "The **aim of great literature seems to be** to create a closed universe or perfect type... **a novel [is] a universe in which action is endowed with form**, where life assumes the aspect of destiny. The world of the novel is only **a rectification of the world we live in**, in pursuance of man's deepest wishes. [The Novel is] the art form whose precise aim is **to become part of the process of evolution** in order to give it the style it lacks... [The novel] **creates a form of salvation**." Albert Camus

Seeing the Value of EP

The English Through Pictures (EP) books are classics of English as a Foreign Language, the EFL genre. Unlike present-day EFL textbooks, the EP books were produced by two persons over a number of years. Great care must be taken when making changes in English Through Pictures (EP). Without great attention to their design, the connections among the sentences, pictures, and pages are broken by changing the books. We see the same tight hanging together (coherency) in EP as we see in other works of literature. A good education with EP-GDM has the same purpose and effects as an education with literature. If we are to make a new EP, teachers and learners have to completely re-make the system with new methods.

Was EP the first of its sort so that, like **Plato** for philosophy and **Don Quijote** for novels, **Richards** did everything that is possible for *English as a Foreign Language*, the EFL **genre**? Maybe all the EFL books that came after EP, **the first great example**, are only able to do one part of all that **Richards** did. [Q 1] This one of the reasons the EP books are better than newer books. Another cause is that different organizations have different purposes. Purpose gives direction to the choices made by designers of learning systems such as books. We will put to one side David Graddol's suggestion that EFL was "designed to produce failure" with languages "learned [with the purpose to] display social position... that your family was wealthy." ([S 7] p.83) Let's take a look at the structure of organizations that make EFL books. From a systems view we see why the EP books are better than newer business textbooks.

With a look at the organizations that design EFL books we see why EP is better. What are the EFL organizations' purposes and needs? Smaller organizations produce better systems. Two persons working for a long time will make a better textbook than a hundred persons working for a short time. The two-person system and the hundred-person system will be so different that no comparison is possible. [Q 2] Why do other textbooks have a need for such great numbers of colors, pictures, boxes, and lines?

Edward Tufte says that the decorations (unnecessary ornament) in books and magazines are not there as a help to readers. Large organizations put unnecessary colors and lines on pages. The purpose of the ornament is to keep certain amounts of authority in different parts of organization: the purpose is not greater understanding. [S 25] Large business organizations, besides trouble with authority, have a need to get profit by selling great numbers of books. They make advertisements which one writer has named "*venal poetry* the word *venal* being used in the sense of being available for hire [money]... for the purposes of *selling*, that is, of advantaging the speaker at the expense of the hearer." ([S 8] p. 376) Richards's purpose was to get everyone into more equal positions so that we all have a "juster position for living." Our purpose is to give power (more advantage) to learners not to keep power limited to designers and large companies.

Two persons, I. A. Richards and C. M. Gibson, designed the EP books. As two persons, "**well chosen**", their system designs are better for language learning than the designs of large organizations. Richards and Gibson made their own choices to develop the EP-GDM system. In

agreement with *Conway's Law* their system will be better than that of larger organizations. [Q 2] In addition, Richards and Gibson's had a purpose which is higher than profit. Their purpose was greater understanding among all persons on earth (EP 3 pp.147–148) and over time (EP 3 pp.217–218). They had a desire for more persons to take part in history with knowledge of the past and powers to make the future. The purpose is "to teach a language... as the necessary vehicle for modern world views... as a means **for letting people learn what they most need to learn, which is how to run a sane state and how to run an educational system...**" [S 17]

With their high (and hard) purpose in mind Richards and Gibson designed their system with as much care as a writer with a novel. As John Ciardi says about discussions of poetry, we see that everything in EP – every letter and space – is in it by the designers' act of choice. I saw this most clearly when reading Yuzuru Katagiri's "Changes in the Newly Printed *English Through Pictures*". [S 9] I have some old prints of EP, but I did not take note of changes in letter-form and white-space till I saw Katagiri's writing. His observations are more support for the idea that large organizations are not be able to give such detailed attention to designing for the needs of learners.

Letter Forms in EP 1's New Print

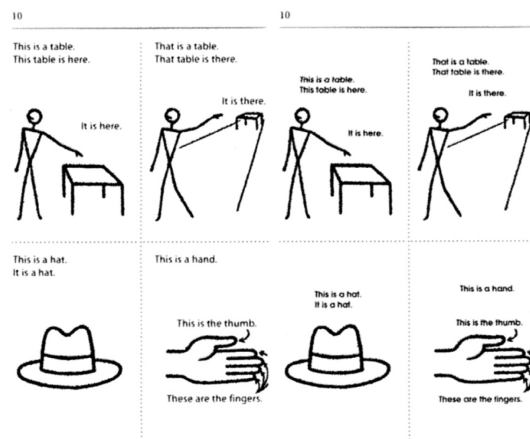


Letter Forms in different fonts

After taking note of the letter-forms (fonts) in older prints of EP, I have to give some thought to the sort of font that is better for learners. This attention to the shape of the letters a > ? and g > ? made John Ciardi's

words about poetry (verse) come to mind. [Q 3] In addition, Richards put a lot of thought into the different forms of media, the printed page, the comics picture, the motion picture and television. So, after taking note of fonts we will take a look a look at the use of white space in EP. How do the positions of the words on the pages come to help the learners?

EP 1: Page 10



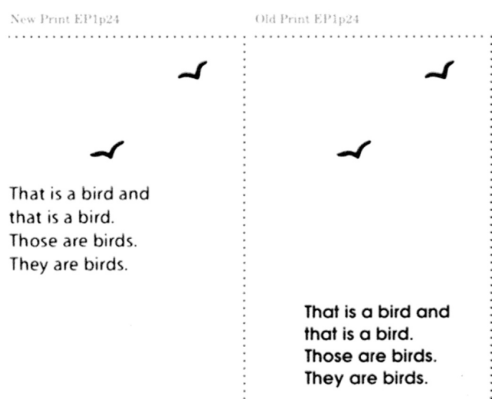
EP1p10: new and old

Katagiri's writing about the new print put my attention on the use of white-space on the pages of EP 1: "... on pages 10 and 11 the words are placed away from the pictures. In the old print, where the words are near the pictures, the man in the picture seems to say those words to himself." (p.233) For comparison, I put side by side a picture of the new page 10 and a picture of a page 10 which I changed. Putting the words nearer the picture and the putting the letters in a different form makes the page

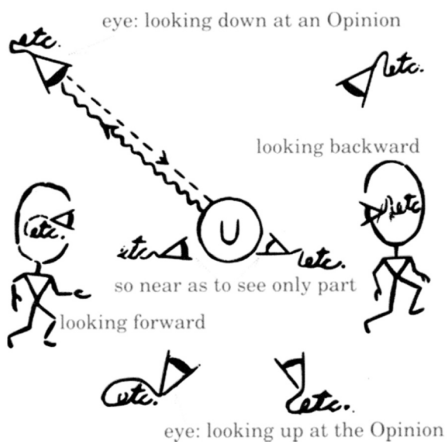
more like the old print. The changes in word position are important for information design. It is good for our understanding when we see things together for comparison.

Richards designed the EP books so that learners have a number of ways to see (check) if their understanding is right or wrong. The pages are full of hints so that, with the necessary time and attention, learners can become more certain of the relations between the statements on the page and the situations in the pictures. In the second part (section) of EP 1 p.10 the smaller size of the table and the addition of lines give a sense of distance. When there are no lines that give the sense of distance (perspective), the position of the sentences is more important. The placing of the words is designed to give help to learners.

EP 1: Page 24 Section 3



EP1p24 3rd part



In the third section of page 24 (EP 1 p.24 s 3) we see that the sentence position is changed in a way which is opposite that of page 10. The words are not far from, but near to, the birds. The feeling of distance between the words and the birds is no longer a help for seeing the sense of “that”. As with poetry, we must see EP pages with the idea that only that which is necessary is there, and that the position of every ink mark was a (conscious) choice made with great attention. We see that even the white-space on the page is there by “act of choice.” [Q 3]

It is a shame to see, on some pages, “that not enough care was taken in the placing of words in relation to pictures.” (p.244) If there is a need to make changes in the placing of words and pictures on the pages of EP, the placing has to respect Richards’s use of white space. He made use of position and direction (placing and facing) to get his points across.

In one of his talks Richards put up a picture that made use of “the Point of View Metaphor and the Psychological Distance Metaphor.” ([S 18]

pp.42–43) In the middle of the picture is an “O” for Opinion in which there is a “U” for Utterance (something said).

Some changes in newer prints of EP are not good. On the other hand, the thinner letters and lighter lines keeping the 4 pictures separate on the page may be a better design. Maybe now the processes of printing are better able to make lines less of a distraction (an attraction of one’s

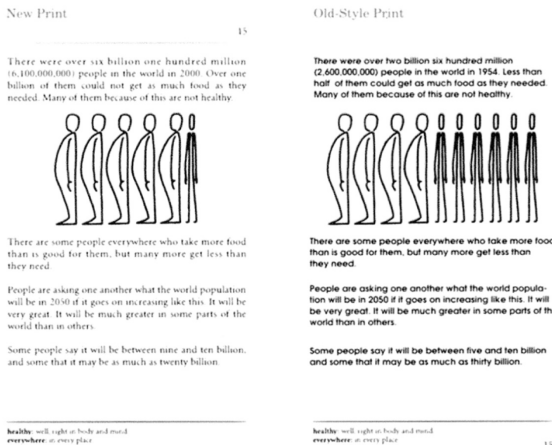
attention to unnecessary things).

But with the greater powers we get from more detailed processes (technologies) we get greater responsibilities in using them. In comparison with the colorful textbooks of today's business and government organizations, Richards's work with EP seems simple. We have to keep in mind that EP's page design is simple by choice. It is designed to keep only what is necessary for the purpose of deep understanding. After years and years of advertisements and propaganda designed to keep us as stupid (as in the dark, or not bright) as possible ([S 2] p.16) it takes time to see the value of simple, deep design.

Changes in substance

Making changes in the substance, the words and pictures, of EP is very hard. The complete work hangs together so tightly that any one change has wide effects. As in a work of poetry or other form of literature, any one change has such wide effects it is not possible to see all of them quickly. Any one change makes a great number of other changes necessary.

Katagiri gives examples from EP 2. On page 13, the electric train's picture in the newer print is not a good match for the bell's picture from the steam train in the older print. The changes in talk about transport on EP 2 p.63 are a cause for making the structure of the page more loose. The older prints let learners see the changes through which persons went through while living from the 1890's into the 1940's.



EP3p15: Newer picture mis-match

My feeling is that very small design changes made possible by new printing processes may be a help. Making the ink marks lighter is good, but the words and numbers in the book should be kept the same. Learners will have knowledge that they are learning from an old book. It is the same as if they were reading *Plato's Republic*, *Cervantes's Don Quijote* or *Lady Murasaki's Tale of the Genji*. The feeling of getting learning from a classic is important for seeing our position in time, for a sense of history. Learners may see

that all persons go on living with the same questions.

A company in Korea made a hand-phone/computer version of EP named *English ReStart*. They made changes in the names: EP 1 is *Basic*, EP 2 is *Advanced*, and EP 3 is *Reading*. Naming EP 3 as *Reading* may be a good idea. The sentences for writing are frequently too long for talking. And, normally, we do not make changes in important works of literature. By the time learners get into EP 3 they have less need for the power to say the long sentences than need for a good grip on (understanding of) the reading. Learners should get a desire to look into

the questions, ideas, and troubles they see in the reading.

Making changes in the numbers and pictures for prices, transport, and population should be the work of teachers and learners and not printing companies. Pages about the troubles facing the world are a good chance for building a new view of the world. It seems natural to go from EP 3 p.15 to on-line writings about food like *Twelve Myths About Hunger* [S 10] and to on-line videos about *Stuffed and Starved* [S 16] about our situation today.

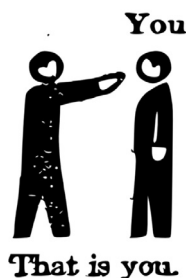
On p. 15, the picture is changed in the newer version. The new picture is a good match for the new print's sentence "Over one billion [of six billion]... could not get as much food as they needed." But the new picture does not go with a sentence it keeps from the old version: "There are some people everywhere who take more food than is good for them, but many more get less than they need." We go to United Nations on-line pages for the newest numbers about population. But, Richards, like Francis Moore Lappé at *FoodFirst.org* [S 10] did not see population as the most important question: "It isn't the case at all that world population is outstripping productivity. No, the point is that the poor parts of the world are getting poorer and the rich richer. That's one of the first premises – that things are getting worse." [S 17] Our earth is getting worse, not because of population growth, but because of the greater distance between the rich and poor.

EP 3 p.14 of the old version has a population graph which goes up to the year 1950 and the lines are dark, black boxes. The new version goes up to the year 2000 with lighter boxes in a quieter, gray color. Re-making the population graphs will be good work for learners to get "useful information about the world we live in" and experience with design (of information). Experience with information design and free software is a good way to see the value of EP.

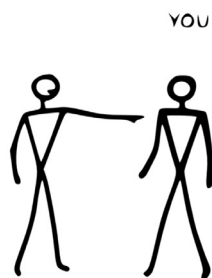
With computers and free software learners can get the newest numbers for population and make graphs themselves. My idea is that, in place of making small changes in the first EP versions, our work is the construction of a new EP with our learners. Someone in history said that a great work is only great if it becomes the cause of other great works. Through teaching with GDM, by making pictures for teaching and worksheets for learning, we make a new great work with every lesson.

LEL

EP



thick, black lines



less ink, fewer parts

For example, older versions of EP 3 p.17 have a map and chart. Newer versions have a list of cities with large populations. These numbers are simple to get from on-line sources (*Wikipedia* or the *United Nations* for example) but I will use the newer book's numbers for an example here. Edward Tufte's guidelines for the use of tables and graphs are a great help for seeing EP and other designs with new eyes. [S 24]

The newer EP 3 versions add text to page 17 where Richards let the map and graph by themselves. The new line, "Today more than half the population of the world is made up of people living in great cities." is very important. We need

to see how to get learners to make this discovery. Mike Davis's book, *Planet of Slums*, [S 26] and on-line interviews point us to the United Nations Habitat report *The Challenge of Slums*. [S 5]

Starting with the questions put to us in EP we are able to make our own pictures for learning. If I ever get a chance to work with EP 3 learners I hope to give them direct experience with information design through free software. Here is an example in which the free **gnuplot** program makes a new graph. The ruling thought for new graphs is getting a high *data-to-ink* ratio. [S 15] The idea is to let the important numbers and words be seen without other parts of the graph taking away attention. Any marks that do not put facts before the reader are taken away or made lighter so as not to get in the way. To my mind this rule of a high *data-to-ink* ratio is a way of seeing how EP is better than newer textbooks with more colors and pictures.

My hope is that my city-population dot-plot [S 13] the is more in the spirit of EP's simple design than the heavy lines and black boxes we see on pages 14 and 17 of EP 3. This growth of design principles toward using less ink and lighter colors [S 15] is parallel with the changes from Richards's *Learning The English Language* (LEL) to EP. The pages of EP have much less ink than the pages of LEL and early Basic English books. With the free program **gnuplot** we can put the right distance between numbers so that we can make comparisons with our eyes. We can see the relations by distance at the same time that we see the numbers and words.

Education for the Free

Table 1: List of City Populations in Newer EP3

City	Country	Population
1 Tokyo	Japan	29,900,000
2 Mexico City	Mexico	27,800,000
3 Sao Paulo	Brazil	25,300,000
4 Seoul	South Korea	21,900,000
5 Shanghai	China	17,000,000
6 New York	USA	16,300,000
7 Bombay	India	15,300,000
8 Beijing	China	14,600,000
9 Los Angeles	USA	14,300,000
10 Osaka	Japan	14,300,000

Populations of the Largest Cities



It is a shame that Ogden (with Basic English) and Richards (with EP) were not able to make their works free, like recipes and free software. The situation with the letter-forms and white-space in the new EP books makes the comparison of 'recipes'

and 'free software' come to mind: we need the rights to make changes by ourselves. [S 22] If EP were free like **emacs** and **gnuplot** everyone could take part in making the pages better for learning. My hope is that we will find a way to let everyone make better and better teaching plans, learning worksheets, and GDM pages with the ideas and systems of free software. The idea that the key to learning programming is "pattern recognition" ([S 6] p.xiii) has much in common with Richards's work.

While the later prints of the EP books put in newer facts (prices and populations) and pictures (trains and buses) it is hard to change a coherent work like EP. Another two persons like Richards and Gibson are needed to work for 20 years if we are to get new EP books. To my

mind GDM teachers and learners are making new EPs every time they get together. My hope is that we are able to get ideas from Free Software for helping one another with our new creations.

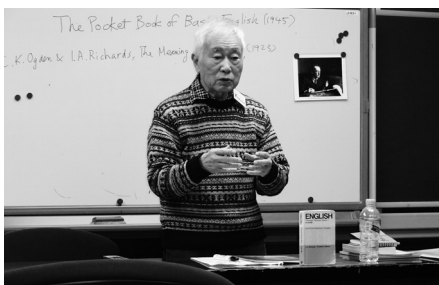
EP gives teaching a purpose higher than getting ready for taking tests and getting into high positions. With only 1050 words of English, EP is a chance for a *Liberal Education*, an education for free persons to make society. In place of getting ready for test-taking in today's schools, EP-GDM teaching should be a step towards the deep reading of books such as *Toward Liberal Education* [S 12] and Orwell's *1984*. The EP books have much in common with Albert Camus's novels of **great literature**: their purpose is to make right (**a rectification of**) our world by becoming part of the process of change (**evolution**). [Q 8] As Camus says that the novel "**creates a form of salvation**" Richards says "**the salvation we are seeking is for all**". ([S 20] p.71) I hope to see EP used as a way into the humanities, novels, and chances for all persons to make a society that does not make a waste of the earth. [S 11]

Sources

1. Camus, Albert. *The Rebel* (1956) pp. 258–263
2. Chomsky, Noam. *Secrets, Lies and Democracy* (1994)
3. Ciardi, John. *Robert Frost: The Way of the Poem* in *Readings for Rhetoric* (1962)
4. Conway, Melvin. *How Do Committees Invent?* in *Datamation* magazine (1968) http://melconway.com/Home/Conways_Law.html
5. Davis, Mike. *Tomdispatch Interview: Mike Davis, Turning a Planet into a Slum* <http://www.tomdispatch.com/post/82790/>
*Japanese Translation: 速報 609号 マイク・デイヴィス 「スラムの惑星」 <http://www.tup-bulletin.org/?p=657>
6. Friedman, Daniel P. Felleisen Matthias. *The Little Schemer* (1996)
7. Graddol, David. *English Next* (2006) pp. 80–83 <http://englishagenda.britishcouncil.org/publications/english-next>
8. Hayakawa, S. I. *Poetry and Advertising* in *Towards Liberal Education* (1955) p. 376
9. Katagiri, Yuzuru. 基礎英語の教え方 *Teaching Basic English* (2014) pp. 233–239
10. Lappe, Francis Moore. *Twelve Myths About Hunger* (1998) <http://foodfirst.org/publication/twelve-myths-about-hunger/>
11. Leonard, Annie. *Story of Stuff* (2007) on-line video and transcript <http://storyofstuff.org/movies/story-of-stuff/>
12. Locke, Louis G. Gibson, William M. Arms, George. *Toward Liberal Education* various editions (1962) (1955) (1948)
13. Messing, Solomon. *Visualization series: Insight from Cleveland and Tufte on plotting numeric data by groups* <https://solomonmessing.wordpress.com/2012/03/04/visualization-series-insight-from-cleveland-and-tufte-on-plotting-numeric-data-by-groups/>
14. Ogden, C. K. *The General Basic English Dictionary*

15. Park, Charlie. *Edward Tufte's "Slopegraphs"* <http://charliepark.org/slopegraphs/>
16. Patel, Raj. *Stuffed and Starved: As Food Riots Break Out Across the Globe, Raj Patel Details "The Hidden Battle for the World Food System"* / on-line interview with /Democracy Now! http://www.democracynow.org/2008/4/8/stuffed_and_starved_as_food_riots
* Japanese Introduction: <http://democracynow.jp/dailynews/20091117>
17. Richards, I. A. *An Interview with I. A. Richards* in *The Crimson* (1969) <http://www.thecrimson.com/article/1969/3/11/an-interview-with-i-a-richards/?page=single>
18. Richards, I. A. *Design for Escape* (1968)
19. Richards, I. A. *Responsibilities in the Teaching of English* in *Speculative Instruments* p.98
20. Richards, I. A. *Speculative Instruments* (1955)
21. Richards, I. A. *The Future of the Humanities* in *Speculative Instruments* p. 61
22. Stallman, Richard. *Why Software Should Be Free* <https://www.gnu.org/philosophy/shouldbefree.html>
23. Trilling, Lionel. *Manners, Morals, and the Novel* chapter of *The Liberal Imagination* (1950) excerpted in *Toward Liberal Education* (1955).
24. Tufte, Edward. *Cancer survival rates: tables, slopegraphs, barcharts* http://www.edwardtufte.com/bboard/q-and-a-fetch-msg?msg_id=0000Jr
25. Tufte, Edward. *Envisioning Information* (1990)
26. United Nations Habitat, *The Challenge of Slums – Global Report on Human Settlements 2003* <http://mirror.unhabitat.org/pmss/listItemDetails.aspx?publicationID=1156&AspxAutoDetectCookieSupport=1>
27. Williams, Robin. *The Non-Designer's Design Book: Design and Typographical Principles for the Visual Novice* (1994)

《参考資料》以下は、2016年1月 札幌セミナー



7. 文学作品に見る情景・状況描写の遠近法とBasic / Wider Basic

—小説 *For Whom the Bell Tolls*

(Ernest Hemingway, 1940) を題材として—

後 藤 寛

まえがき

本稿では E. Hemingway の文学作品のうちの長編小説 *For Whom the Bell Tolls* 『誰 (た) がために鐘は鳴る』(1940) に注目し、語で創作する絵画的な芸術となる情景・状況描写を、遠近法 (perspective) の観点から見てみる。彼の作品は主観的な感情表現を極力排し、目に見える客観的な情景・状況や人物の行動・風貌ばかりきめ細かに描写するが、これは空間を近景・中景・遠景などとして描くルネサンス期以降の、いわゆる近代的な絵画遠近法に通じる。

ルネサンス期以前の中世の絵画遠近法は宗教的な神／悪魔の視座 (point of view) に立ったもので、遠くのモノが近く (here の空間) にあるものとして大きく描かれ、逆に近くのモノが遠く (there の空間) にあるものとして小さく描かれもし、人間の目には視点が定まらなかった。それが近世のルネサンス期に入り人間が社会的・宗教的束縛から逃れ、人間性そのものを追求するなかで絵画手法もまさに人間の視点に立つものとなり、いわゆる今日の幾何学的な「遠近法」はこのルネサンス期に確立した。遠近法を採り入れた代表的人間が画家でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) であった。彼の絵画 *The Last Supper* 『最後の晩餐』や *Mona Lisa* 『モナリザ』などは、この点からもよく知られたものとなっている。

自然風景や情景・状況を、空間的に HERE (<in/to THIS part of the place) と THERE (<in/to THAT part of the place) に2分割すること、また人称代名詞 I, YOU, WE, HE, SHE, THEY や指示代名詞 THIS, THAT, IT, THEY, THESE, THOSE による人・物・事の指示法、さらに指示性のやや弱まる広義の指示代名詞 THE などを、deictic category (直示範疇) から perspective contrast (遠近コントラスト) として見るのに Hemingway の作品は都合がよく、その宝庫であると言える。情景・状況描写は人間の space perception (空間知覚) の方法と大いに関わっている。それが言語的には linguistic spatial representation (空間表現) となる。

For Whom the Bell Tolls は目下、筆者の手元にあるペーパーバック版でほぼ500頁にまたがる相当な長編で、Hemingway はこれを主に中米キューバで1939年から40年に約1年半を費やし執筆した労作であるが、全編が第二次世界大戦直前のスペイン内戦 (Spanish Civil War) [1936-39] での戦禍をテーマとするものである。ここではアメリカ・モンタナ州のモンタナ大学でスペイン語を教えている主人公で、現地スペインの兵士たちから終始スペイン語で inglés (イギリス人) と呼ばれるが、実際は americano (アメリカ人) [スペイン人にとってのアメリカとは、入植地の中南米のことであるので、スペイン語では正確には norteamericano / estadounidense (北米人／アメリカ合衆国人)] である Robert Jordan を含め、登場人物全員がスペイン語で対話をしていることになっている。したがって、しばしば文が意図的にやや Spanglish (スペイン語風の英語語法・文体) を用いて書かれている香りもするが、英語のバリエーションに触れるのには好都合であるし、いくつかの Basic 語もさらに意味拡張で考え、

やや上級の Basic となる私案としての仮称 Wider Basic (拡張 Basic) を設定し、Basic 全体の輪郭を既成のものからさらに拡大する発想からも参考となる作品の1つとみている。Wider Basic に関しては後藤 (2014 a) でそれなりにすでに提示はした。

今日もはや英語という言語が英・米の国境を完全に超え、この言語を用いた文学も伝統的な English literature (英文学)、American literature (米文学) などとは視点・見方を異にする「English-language literature (英語文学)」が新しいジャンルとして注目されている。欧州各地を回り巡る多分に紀行文学的な色彩ももつ Hemingway の作品は、まさに国境を越えた「英語により表現される文学」として、英語文学であると筆者は考えている。本稿ではこの英語文学的な視点から見ていく。

なお、ここでは発想そのものの基本的同一性の確認と、意味を透かし見る目的なども含め、この作品のスペイン語翻訳版 *Por Quién Doblan las Campanas* (Por Lola de Aguado, 1969) も適宜、対照して考えてみる。さらには *Básic English* をモデルに、スペイン語を簡略化した *Básic Spanish* の構想上での一環も背景にある。今日の世界でスペイン語は英語とほぼ同じ約4億のネイティブスピーカー人口をもつが、英語に比べはるかにやさしい (learner-friendly な) 言語である。日本人にとって話すのも生理的に無理がない。「神と語る言語」とも言われるこの聖なる言語スペイン語への注目は、英語全体をより身近なものに簡素化して見る上でも有益となる。

1. *For Whom the Bell Tolls* の遠近情景・状況描写

小説 *For Whom the Bell Tolls* では monologue (独白) の形式で登場人物の心情が叙述され、心理描写も多いように (たとえば第13章など) 思われるかもしれない。しかしその独白はスペイン内戦で主人公 Robert Jordan が上官からの命令に従いファシストの敵軍を攻略するためのゲリラ戦法として、ダイナマイトで橋梁を破壊することの任務遂行に関わる心の苦悩のほぼ1点に焦点が定まっている。主人公は大学を休職し、国際義勇軍の一員としてスペインには約1年赴任しているが、橋の破壊のためのこの戦場でのいわゆるボランティアとしての任務は時間的にはわずか4日間で、その間だけの苦悩であり、任務遂行に関わる密度の濃い特徴ある描写がなされる。これだけの長編で全編が数日間だけの出来事として描かれるという点では、きわめて特異と言える。緊迫する戦争がテーマであり、敵の位置を空間的・心理的遠近でとらえる描写法にここでは特別に注目したい。

心理描写は、後藤 (2015) で提示した $\langle x \text{ BE HERE / THERE IN } y \rangle$ [$y = \text{ONE'S MIND (HEART)}$] という直示法的 (deictic) な sememe (意味素) で示される構造が基底にあると考えるが、これを基にこの作品での主人公の思いを一口の Basic 文で言うとするれば、He was responsible for smashing up the bridge by using *dynamite*, and that was what was in his mind at all times. [*dynamite*: + α Basic 語] のようなものと言える。心理描写というよりむしろ心的イメージ (mental image) であり、心象風景 (imagined scenery) と言えばよいかもしれない。いわゆる感情描写とはやや異なると言ってよかろう。そしてこの心象風景がここでは心理的距離の近い近景として描かれる。冒頭書き出し部分では情景が次のように描写される [実線・破線・波線は筆者、以下同様]。

- 1) He lay flat on the brown, pine-needled floor of the forest, his chin on his folded arms, and

high overhead the wind blew in the tops of the pine trees. The mountainside sloped gently where he lay; but below it was steep and he could see the dark of the oiled road winding through the pass. There was a stream alongside the road and far down the pass he saw a mill beside the stream and the falling water of the dam, white in the summer sunlight.

'Is that the mill?' he asked.

'Yes.'

'I do not remember it.'

'It was built since you were here. The old mill is farther down; much below the pass.'

He spread the photostat military map out on the forest floor and looked at it carefully.

The old man looked over his shoulder. ...

これは Hemingway の作品に特徴的な書き出しの空間遠近法 (spatial perspective) による情景・状況描写である。冒頭始発語で人称代名詞 He などによる書き出しとするのも Hemingway の好んで用いるスタイルで、英語的発想からすれば読み手は名前が気にかかるがなかなか明かされず、後になってその固有名が出されるパターンである。he などは指示的には遠称であり、遠近法的には遠景に置かれる形での描写である。He で振り出し、固有名をあと出しとするのも 1 つの書き方技法となる。この文中の対話でも単に I, you での指示詞 (demonstrative) での呼称となっている。最後の破線部でこの he の対話の相手も The old man とされるのみで、固有名は示されていない。示されるのはもっと後となる。

実線による下線部に注目すると、絵画的な遠近法による描写法が顕著に浮かび上がってくる。指示的な近称・中称・遠称 (proximal / medial / distal place relationship) と平行するそれぞれ近景・中景・遠景 (proximal / medial / distal view) としての、絵画的遠近法 (perspective of drawing) が見えてこよう。同時に、大まかに近景 (PRO)・中景 (MED)・遠景 (DIS) 以外に、不定称 (indefinite place relationship) と平行する目に見えない情景は不定景 (indefinite view) となる。

一視点 (point of view) から見て情景は、近景・中景・遠景の定景 (DEF <definite view) と不定景 (INDEF <indefinite view) に二分できることになる。前者の 3 つと後者の 1 つの 4 つをここでは全景 (PAN <panoramic view) としておこう。そこでこれら DEF (PRO, MED, DIS) と INDEF から PAN を遠近法的情景として見ていくこととする。

ここでの情景は《〈彼〉の位置が森の中、顎を組んだ両腕にのせている、彼の目線は松葉の落ちた地面とほぼ平行、上には吹く風、そこは山腹で斜面はゆるやか、下の傾斜はけわしい、オイルで汚れた黒ずんだ道路が見える、その道路は峠に抜けている、道路に沿って小川が流れている、さらに峠を下ったところに製材所 (a mill) がある、製材所は小川のそばにある、水の落ちるダムが見える、水が夏の太陽の下で白く光っている》である。この情景下で彼が「あれが製材所 (the mill) か、覚えていないが」と聞くと、「あれはあんたがスペイン (here) に来てからできたものだ、古い製材所 (the old mill) はもっと下で峠をずっと下ったところにある」という返答となる。

話の流れから指示物の製材所は新旧の 2 つ (two mills) あることが分かる。古いほうの the old mill はこの位置からは見えない不定景 (INDEF) として描かれている。またここでの since you were here は after you came here とも言えるが、here の指示するものは彼のいるこの森

の中の現在地ではなくスペインという国の意味である（この作品では彼はこのときすでにスペインに約1年滞在していることが後に書かれる）。ここでは since you were here in Spain の意味で、スペインの全景 (PAN) ということになる。空間知覚 (space perception) と関わる here という語のもつ意味範囲の遠近両用性を示す例である。

さらに次に彼が地図 (map) により現地を確認するが、これも本稿の趣旨からは象徴的で、ここでは東西南北の方位空間を示す2次元空間の地図が、眼下の3次元空間の現地風景の鳥瞰図 (bird's-eye view) ということになる。

なお二つ目の下線部での Basic でもある his chin on his folded arms は、いわゆる attendant circumstances (付帯状況) である。付帯状況は状況描写に頻出する描写法であり、これも本稿で特別に注目したいもので詳細は次節で扱う。この作品のスペイン語翻訳版 (Aguado, Lola de (1969)) でこの箇所を見てみると、con la barbilla apoyada en los brazos cruzados (= with the chin on the folded arms) と con (= with) を用いて訳されている。

スペイン語での付帯状況描写では con は英語での with のように頻繁に省略されることはなく、con を用いるのが一般的である。また実線部の2つの所有格 his は、スペイン語ではそれぞれ la barbilla (= the chin), los brazos (= the arms) と女性単数形の la (= the), 男性複数形の los (= the) となっているが、これが普通でもある。「まえがき」でも触れたが、his など代名詞も the も同じ deictic category (直示範疇) であることがスペイン語からも確認できる。いずれにせよ、この1) で近景 (PRO)・中景 (MED)・遠景 (DIS)・不定景 (INDEF)・全景 (PAN) が概略描かれるが、細部はまだ示されていない。これにつづいて次の対話文となる。

2) 'Then you cannot see the bridge from here.'

'No,' the old man said. 'This is the easy country of the pass where the stream flows gently. Below, where the road turns out of sight in the trees, it drops suddenly and there is a steep gorge-'
'I remember.'

'Across this gorge is the bridge.'

'And where are their posts?'

'There is a post at the mill that you see there.'

The young man, who was studying the country, took his glasses from the pocket of his faded, khaki flannel shirt, ...

ここではこの作品の主テーマである爆撃する目的の橋 (the bridge) について語られている。この橋は彼ら2人のいる場所 (here) からは見えず、不定景 (INDEF) ということになる。さらに山の下方に視点に移され、道路が樹木で見えなくなるところで地形が急に下へ傾斜していてそのあたり (there) に険しい峡谷があり、そして Across this gorge is the bridge. 「目的の橋はその峡谷にかかっている」というのである。これは知覚の順序とも関わる言い方で、gorge とすぐ前で言ったのでこれが old/known information (旧・既知情報) となり、this (その) と指示的に中称になるとともに、遠近法的に中景 (MED) とし、the bridge が遠景 (DIS) となる。統語法的にも〈近いものは近づけよ〉の原則から this の前置した語整序となっている。

Across this gorge is the bridge. の this (今話題にしたその) は日本人には使いにくく that のほうがしっくりするように感じられがちであるが、こういう場合に英語では普通で、よくある指示法である。この箇所を上記スペイン語翻訳版でまた確認してみると、El puente

atraviesa esa garganta. (= Basic: The bridge goes across that deep valley.) [注: valley; verse/geology word] と訳されていて、中称の指示形容詞で女性単数形 esa = that である。女性複数形は esas, 男性単数形は ese で複数形は esos である。

つづいて Where are their posts? とあるが, where も不定景 (INDEF) の指示的指標である。また their posts (敵部隊の駐屯所) は旧・既知項で, それが複数あることがわかる。それに対する返答が There is となり, a post, the mill, you see there であるので, すでに話題とされている新旧2つの製材所のうちの見てはいないが古いほうの製材所 (the old mill) に1つ駐屯所 (post) があるわけで, ここでは a post が new/unknown information (新・未知情報) として与えられる。そこでこれまで He であった人物が The young man であることが明かされる。対話をしている人物が老人と青年ということである。しかし固有名はなお明かされない。

ここまで見てくると Hemingway の好んで用いる何かと2項対立的で, 音楽的でもある counterpoint (対位法) の書き方スタイルも見え隠れしているように思えてくる。ここで青年はあたり一帯の景色を取り込もうと, 今度は地図ではなく双眼鏡 (glasses) をポケットから取り出す。さらにこれにつづく対話が次である。

3) 'There is no sentry.'

...(Omission)...

'Perhaps he is in the shade,' the old man explained. 'It is hot there now. He would be in the shadow at the end we do not see.'

'Probably. Where is the next post?'

'Below the bridge. It is at the roadmender's hut at kilometer five from the top of the pass.'

'How many men are here?' He pointed at the mill.

'Perhaps four and a corporal.'

'And below?'

'More. I will find out.'

'And at the bridge?'

'Always two. One at each end.'

戦地では地図も双眼鏡も必需品であるが, ここでの遠近法的な見方からすれば双眼鏡は遠いものを近づける, すなわち遠景 (DIS) を近景 (PRO) として見るまたも象徴的な道具・装置となる。青年が There is no sentry. 「見張り番の兵隊 (歩哨) は見えない」と言う。景色に人間の姿は入らないのである。すると老人が「あそこ (there) は暑いので端っこの日陰にいるんだろう (would)」と言う。ここでの would など subjunctive (叙想法・仮定法) も, 遠近法的には現実から離れ距離のあるものとしてみる心的描写法で, 距離を置くぶん断言をしないわけで丁寧さにもつながる。これに青年は Probably. 「おそらくそうだろう」と言い, Where is the next post? と尋ねる。where による指示は2) ですでに触れたとおり, 不定景 (INDEF) である。また their posts とあった文脈からも, 指示的には the next post (もう1つの敵の駐屯所) が the next と定性 (definite) となるのは自然である。

そこで老人が, 「橋の下で峠から5kmの道路修理の人夫の小屋のところにある」と言う。すると How many men are here? と, またも遠景 (DIS) の製材所 (mill) を指差して here (そこ) で指定する。ここでの here は製材所の存在が既知となり, 指示的には中称で, (here) at

the mill という遠近法的に中景 (MED) として知覚され、遠景 (DIS) が (there) below the bridge (橋の下) と (there) at (each end of) the bridge (橋の両端) となる。

How many men are here? の箇所をスペイン語翻訳版と対照してみると、¿Cuántos hombres hay allí? (= Basic: What number of men are there?) となり、英語の here はスペイン語では allí = there で遠称となり、英語話者とスペイン語話者の遠近に関わる知覚上の相違点を見ることができる。なお post であるが Basic では国際語彙の +α 語として郵便関係の文脈で post を用いるが、ここでのような軍事的な「駐屯所 (地)」の意味で用いるのは Wider Basic でも許容外とするのがよい。これは box (詰所) でよい [次節、例文 3) 参照]。

以上 1)~3) で遠近法の観点から、絵画的情景・状況描写を Hemingway の *For Whom the Bell Tolls* の冒頭書き出し部分で見てみたが、青年 He と The old man の固有名が明かされるのがこの後である。「まえがき」でも触れたが、青年は Robert Jordan というアメリカ人で、テーマは第二次世界大戦直前の 1936 年から 39 年まで 3 年間に渡ったスペイン内戦 (Spanish Civil War) である。ソ連と国際義勇軍の支援する人民戦線政府軍と、ドイツ・イタリアの援助のもと反乱を起こしたフランコ将軍の率いる軍部 (ファシスト軍) との戦争であったが、結果的にはフランコ側の勝利で終わりスペインは 1975 年まで独裁体制となった。

最終的に Robert Jordan は橋梁の破壊に成功し任務は遂行するが、脚を負傷し出血多量で死が暗示される。結末は Hemingway の作品に特徴的な不透明 (opaque = unclear) な幕切れとなる。真によく見える氷山の一角のみをきめ細かに書き、見えない部分は書かないがゆえの、彼の作品の意味的不透明性に関しては後藤 (2015) で扱った。さらには (2016) で触れもした。

ところで Hemingway の作品には象徴的な語がいくつも用いられるが、この作品では松脂を出す松ノ木 (pine tree) が巻頭から巻末まで、生命の象徴語として位置づけられていることを付け加えておきたい。なお、*For Whom the Bell Tolls* 『誰がために鐘は鳴る』というこの作品のタイトル中の bell は、英語に to toll a bell at one's death (人の死を弔い鐘を鳴らす) という言い方もあるように、「弔鐘」であるとともに「警鐘」ということになるが、for whom の whom が誰か? は意味的にやはり不透明な部分と言える。何度も繰り返し読み、味わう [これを ruminative reading (反すう読み) と呼んでおこう] のに適する作品の 1 つである。

2. 移動事象の空間的経路描写 vs. 変件事象の時間的付帯状況描写

冒頭「まえがき」で言及した英語文学 (English-language literature) 的な視点から、さらに見ていくこととする。文学作品の近景・中景・遠景・不定景の遠近情景・状況描写で特に注目したい 1 つは情景での中景 (MED) の描写法で、これは空間移動事象としては path (経路: P) と平行する。ここで問題としたいのが、空間とともに時間が関わると言える状況としての、いわゆる attendant circumstances (付帯状況: AC) の描写法である。そもそも motion event (移動事象: ME) としての ①移動 ②ゼロ移動 (状態・様態) を、その原始的な sememic structure (意味素構造) でそれぞれ次のように設定したい [後藤 (2014 b) ですでに提示はした]。

① <w GO/COME FROM x PAST y TO z>: w が起動し x から y を経由して z へと至る

② <(WITH) α (BEING) AT β>: α は β となっている

これらは deep sememe (深層意味素) に基づく構造型で、移動の状況を ①の GO/COME の代わりに、より上位レベルの sememe (意味素) として視点の介入しない unmarked (無標)

な MOVE, また PAST を後藤 (2015) で提示した BY WAY OF とすることで, 〈w MOVE FROM x TO z BY WAY OF y〉でもよいが, ここでは wxyz という移動の本来のプロセスである source (起点: S) → path (経路: P) → goal (着点: G) の順にも一致する意味素表記として, 経路 P をやはり PAST と提示しておく。①では特にこの経路 P に注目したい。②は付帯状況 AC となる。事象的に①と②では①が上位構造, ②が下位構造と言えるが次にこの 2 つを 1 つに合成した意味素構造を③, ③' として提示する。

③ 〈(WITH) α (BEING) AT β(,) w GO/COME FROM x PAST y TO z〉: α は β となっていて, w が起動し x から y を経由して z へと至る

③' 〈w GO/COME FROM x PAST y TO z(,) (WITH) α (BEING) AT β〉: w が起動し x から y を経由して z へと至り, そのとき α は β となっている

③は上の②+①の合成, ③' は①+②の合成構造型で, 遠近法による絵画風に描かれる英語の情景・状況文はこの③, ③' の原始的な意味装置から大量生産されると仮説的に考えられる。

ここで特に小説文に頻出する付帯状況 AC の状況描写に視点を移すが, モノ・コトの状況を述べる文 (状況文) をここでは situational sentence の意味で, SIT-SEN (〈situation-sentence〉) と略表記しておく。これはいわゆる I. A. Richards 風の SEN-SIT (〈sentence-situation〉) とは区別したい。SIT が無限であっては文字どおり事態 (situation) の收拾がつかない。SIT は SEN のように無限ではなく, 深いレベルでは普遍性のあるものとして言語的に処理できると考えた。端的には, Basic の世界そのものがこの考え方を支えるとも言えるであろう。

さらにこれは数理の世界で, 個々の特殊な事象からその一般化へと帰納的に抽象化され方程式として定式化 (記号化) されるようなものとも考えたいが, ここでの SIT-SEN における SIT として, 小説文に特徴的な付帯状況 AC を示す表層文の語配列法をマトリックス (鋳型) で示したい。これも後藤 (2014 b) ですでに提示したのであるが, 改めてここで確認しておく。

付帯状況 (AC) の語配列マトリックス
(Word Order Matrix : WOM)

		③	
		CC	
with	N	Φ	V -ing
		<BEING>	V -ed
		<BEING>	A
Φ		<BEING>	AD

(N : nominal CC : circumstantial complement V : verb A : adjective AD : adverb)

AC-WOM の基本語配列は①-②-③であるが, ①の with が空 (Φ) となる②-③も頻繁に起こる。さらに付帯状況は, いわゆる分詞構文として文中で前置となる前置分詞構文 (prepositional participial construction), または後置となる後置分詞構文 (postpositional participial construction) の形式をとって浮上するが, 基本的に前者は時間的には前, 後者は後または同時となる。したがって後置分詞節 (postpositional participial clause) 中では, ③はすべて意味的に《and (now / at the same time) + N+BE+V -ing, -ed / A / AD》となる。

この時間的 〈now / at the same time〉は, 空間的には直示的 (deictic) な 〈here〉または 〈there〉と平行する。なお V -ed, A, AD はそれぞれその前に 〈BEING〉をもっているが, 表層上に being として具現化するのは稀 (まれ) となる。要は, ③はすべて現在分詞-ing をもつ

ていることになる。また②-③で N (名詞相当語), CC (状況補語) が copula (繫辞) の BE を介し論理上 N = CC の関係となる。

なお、付け加えておくと、いわゆる分詞構文での-ing もその前に〈WITH〉をもっていると考えられる。with + -ingの連続配置は一般には表層上に具現しない。しかし、たとえばHe went out without saying “good-bye”. のように without となると-ing と共起し、この V-ing が動名詞と見なされるが、本質的には-ing 分詞 (participle) も-ing 動名詞 (gerund) も同じである。付帯状況的な描写法という点では両者に区別はなく、動名詞構文も分詞構文と言える。

付帯状況 AC は事象的にゼロ移動、すなわち状態であり、ユークリッド幾何学的には 0 次元空間である点 (point) の概念である〈AT〉と結びつくと言えよう。英語に That's where it's at (まさにそこがポイントである) という透明な空間表現があるが、このあたりの事情の象徴的な表現であろう。同時に AC 描写は文中で時間的な意味 (temporal meaning) をも包み込み、空間的な移動経路 P の描写のような直線思考ではなく、曲線思考に思える。そもそも「状況」を意味するラテン語起源の英語 circumstances は circum-(=round) + -stances (=stand), すなわち「周りに立つこと」の意味から来ている。遠近法的には近景として見る描写と言えよう。

推理小説作家・松本清張氏がよく知られる作品に『点と線』や『状況曲線』があるが、刻々と変化する状況 SIT は、やはり点と線により形成される曲線的なものに感じる。数理概念を用いれば、以前からたびたび機会あるたびに筆者が触れてきた「微積分」の考え方も符号するし、ここでの趣旨とも結びつくと思える。実は曲線も数理的微積分からは直線であることが見えてくるが、状況がいわゆる直線的か曲線的かからすればやはり曲線的な感じがする。

手順として、まず日本人が不得意な移動事象 ME における空間的・直線的な特に経路 P の描写で、遠近情景的には中景描写に注目したい。文例をやはり Hemingway の *For Whom the Bell Tolls* から引き合いに出す。最終章 (第 43 章) からの文例である。

- 1) ... he looked down across the slope to where the bridge showed now at a new angle he had never seen.
- 2) ... he looked down the slope across to the road and the bridge and the gorge ...

それぞれ 1), 2) の破線部の意味は同じか異なるか? 1) は down across と to の間に the slope, 2) は down と across to の間に the slope が割って入る語整序である。空間描写では上・下 (up/down) の空間はそれが先に指定される。したがってこの場合 1), 2) の文のいずれもまず down が指定されるが、それぞれ前半部は次のように考えればよい。1) 彼は下方の斜面越しに where 以下の方向へと目を向けた。2) 彼が下方の斜面、さらにその斜面の向こうの道路と橋と峡谷を見た。

すなわち 1) も 2) も the slope は中景 (MED) であるが、1) のほうが 2) より視線の移動経路 P として the slope が意識される度合いは弱いと考えられる。別な言い方をすれば、1) では視線の移動経路 P の the slope よりも着点 G の the bridge が強く意識され、2) では視線の移動経路 P が slope → road となり、時間的には一瞬でも結果的に gorge が着点 G となると言えよう。

このあたりを検証するためスペイン語翻訳版と対照してみると、1) は ... vio el puente desde un ángulo ..., 2) は文を改めて Miró hacia abajo, hacia la carretera, el puente y la garganta, ... と訳されている。やはり 1) では橋 (puente) が目に入った (vio = saw) とされ、下方の斜面に相当する語は訳出されていないが、2) では下方 (hacia abajo = down to) と訳されこれ

が斜面に相当する部分となり、さらに道路 (carretera)・橋 (puente)・峡谷 (garganta) の方向 (hacia = to) へと目を走らせた (miró = took a look at) となっている。

遠近法による空間描写では必ず spatial particle (空間詞) が用いられ、英語の場合その配列法には特別に注目される必要がある。1) の down across, 2) の across to など空間詞が複合的、重層的に用いられる complex multiple spatial particle (複合重層空間詞) を用いての特に移動経路 P の英語での描写法が日本人は不得意である。

次に移動経路 P の描写と、付帯状況 AC の描写が織り込まれた例を見てみる。Hemingway の作品はどれもまさにその宝庫であるが、この作品で次は主人公の Robert Jordan が山の上の松林の中に隠れ、下にある敵の詰所の見張り兵の行動を近距離から監視し、橋梁の爆破の好機をさぐっている場面である。やはり最終章 (第 43 章) から引用する。

3) He saw the two men in blanket capes and steel helmets come around the corner of the road walking toward the bridge, their rifles slung over their shoulders. One stopped at the far end of the bridge and was out of sight in the sentry box. The other came on across the bridge, walking slowly and heavily.

これは遠近情景としては遠景 DIS・中景 MED として視覚化できる。第一文の実線・破線部では、破線部の the corner of the road が経路 P の描写である (the bridge が着点 G)。そして次の実線部が〈they slung their rifles over their shoulders / their rifles were slung over their shoulders〉という叙述文を背景にもつ付帯状況 AC の描写で、with が空 (φ) の例である。そしてここでは their shoulders が移動事象 ME 的には着点 G である。また第二文の破線部の the bridge は、着点 G ではなく経路 P である。

第一文、第二文とも移動の経路 P が描写されているわけで、これはそれぞれ後ろで walking となり、現在分詞-ing により移動の進行中である描写にすんなりとつながる。こういう描写法も付帯状況 AC に準ずるものとし、ここでは準付帯状況 QAC (〈quasi-attendant circumstances〉) と呼んでおく。

第一文の波線の saw ... come であるが、see など知覚動詞 V による〈S + V + do/doing/done〉の構造型では do は動作の完了、doing, done は状態である。すなわち I saw him do it. / I saw him doing it. / I saw it done. はそれぞれ「～したのを見た」、「～しているのを見た」、「～されるのを見た」であるが、これらの知覚上の微妙な相違は意外に重要である。Hemingway のこの作品では橋の近くにいる敵を監視することなど、遠近法的な視覚描写が特別になされ、必然的に〈S + saw ... do/doing/done〉の構造型が頻出する。

第一文では波線部 saw ... come, 第二文では波線部 came が用いられているが、両者ともそれぞれ後ろの walking と連鎖し、視線の移動に伴う状態描写に移っていく。なお下線部 their rifles slung over their shoulders をスペイン語翻訳版で対照してみると、con los fusiles a la espalda (= with the rifles at the back) となっていて、前節の 1) でも触れたが、スペイン語ではいわゆる付帯状況 AC の描写では con (= with) を用いるのが定石で省略はほとんどされない。この部分は Basic では (with) their military guns hanging down over the tops of their arms などとなる。military は army でもよい。

さらに次の例で見てみる。この作品に登場する女性は人民政府側の大柄な中年女性 Pilar と、若い Maria の 2 人だけで、Pilar は兵士の妻であり、Maria は隠れ場所の洞窟で Pilar の手伝い

役の立場にある。まず Pilar が語りかける。第 12 章からの一節である。

4) 'Come here, *guapa*, and put thy head in my lap.'

Maria moved close to her, put her arms out and folded them as one does who goes to sleep without a pillow and lay with her head on her arms. She turned her face up at Pilar and smiled at her but the big woman looked on across the meadow at the mountains. She stroked the girl's head without looking down at her and ran a blunt finger across the girl's forehead and then around the line of her ear and down the line where the hair grew on her neck.

最初の文中でイタリック体の *guapa* (原文通り) はスペイン語であり good-looking girl/woman の意味であるが、親しい女性への呼びかけである。thy というこの作品に特徴的な古英語も使われている。この情景描写は Hemingway のほほどの作品にも頻出する彼の sexuality (性的関心) の顕われの 1 つで、あらゆる形態のものが頻繁に描写されるが、ここでは女性間の同性愛 (lesbianism) が暗示される。順に身体の頭、膝、腕、顔、指、額、耳、うぶ毛、首、そして牧草地と山がモノとしてその移動・状態が遠近情景的に描かれる。この下りにさらにつづく文中には rabbit (ウサギ) という語が何度も出てくる。スペイン語翻訳版ではすべて conejito (子ウサギ) [-jito は conejo (ウサギ) の縮小辞] と訳されているが、ウサギの意味の conejo, conejito はスペイン語ではまったくの卑猥語である。さらに cat (ネコ) という語が 2 度出てくるが、英語ではこれも卑猥語ではある。この文脈では 2 頁以上にまたがって他にも卑猥性をもつ表現が用いられるし、他の箇所でも同様である。Hemingway の作品での語の用い方には何かと驚嘆させられる。こういう性描写での含蓄 (implicitness) も、近景 PRO での露骨さ (explicitness) を中景 MED・遠景 DIS とすることに通じる。実線部で 1 つ付帯状況 AC も現われる。

次は主人公 Robert Jordan がさし迫った橋の破壊作戦に備え近くの情景、状況、立地条件などを調査し、何かと思索しているなかでの一場面である。第 5 章に出てくる一節である。

5) Robert Jordan walked through the pines, feeling his way from tree to tree to the edge of the meadow. Looking across it in the darkness, lighter here in the open from the starlight, he saw the dark bulks of the picketed horses. He counted them where they were scattered between him and the stream. There were five. Robert Jordan sat down at the foot of a pine tree and looked out across the meadow.

ここでは実線部、破線部がポイントとなるが、主人公の移動経路 P の順にしたがって眼前に展開する情景・状況が近景 PRO、中景 MDD、遠景 DIS として描かれる。この段落はここで切れるが、最後の文では彼の視線は松ノ木の下を起点 S とし、経路 P がはるか向こうの牧草地となり、着点 G は明示化されず遠近情景としては不定景 INDF ということになる。実線で示した deixis (直示) の here, there で、特に here のほうの用い方は注目しておいてよい。第二文で there ではなく here が用いられているが、これは前節 1) と 3) で触れた here と平行するし、さらに前節 2) で触れた Across this gorge is the bridge. の this の用いられ方とも平行する。

ここでの here は、there のほうが日本人にはしっくりするように感じられがちであるが、遠近情景的に遠景 DIS が中景 MED として知覚されていることになる。この作品の書き手である Hemingway 自身がそういう知覚で書いていることになる。There were five. は馬を数え

たあとの内省もあり、here は起こらない。最初の文の破線中の way に関しては、このあと way 構文として扱う。最後の文がスペイン語翻訳版では *Jordan se sentó al pie de un pino, con los ojos fijos en la pradera.* と訳され、後半部の *and looked out across the meadow* という叙述部は、いわゆる付帯状況 AC の *con los ojos en la pradera* (=Basic: with the eyes fixed on the grassland) と、この場合は意味をとらえて変換されている例として興味深い。

次の 6), 7) の 2 例では移動経路 P の描写とともに、特に付帯・準付帯状況 AC/QAC の描写として現在分詞 -ing・完了分詞 -ed がいくつも同時に現れるものを取り上げる (経路 P の描写部分に破線を引くことはここでは省略する)。6) は戦中に処刑される人間たちがその前に神に祈りを捧げ、同時に僧侶の祈りの詞を聴いた後に、部屋のドアの鍵が解かれ処刑場に連れ出される場面で、Pablo という上の 4) での Pilar の夫がそれを監視しているところである。7) は Pilar が以前親交のあった Finito という闘牛士であった人物の、闘牛場での思い出を回顧している場面で、牛を殺したあと目は悲しげ (sad-eyed) でも顔にはそれを見せず、微笑み (smiling) を浮かべていたというわけである。smiling という語がくり返されている。6) は第 10 章、7) は第 14 章の一節である。

6) They were still praying as they had been, the men all kneeling, with their heads up, looking toward the priest and toward the crucifix that he held, and the priest praying fast and hard and looking out over their heads, and in back of them Pablo, with his cigarette now lighted, was sitting there on the table swinging his legs, his shotgun slung over his back, and he was playing with the key.

7) She saw him moving swiftly, dragging around the ring, smiling, bowing, smiling, his assistants walking behind him, stooping, picking up cigars, tossing back hats; he circling the ring sad-eyed and smiling, to end the circle before her. Then she looked over and saw him sitting now on the step of the wooden fence, his mouth in a towel.

これら 2 例では現在分詞、完了分詞を用いての N + V -ing/-ed/, N + A/AD による付帯状況 AC、準付帯状況 QAC の言い方がいくつも見られるが、英語思考の難しさの壁を破るにはこういう情景描写法にどうしても慣れる必要がある。ここで分詞を用いるいわゆる進行形の文に関して一言つけ加えておくと、たとえば文 *I am reading a book.* は 〈I am HERE NOW reading a book.〉のような付帯状況的なものとも考えられる。〈I am HERE reading a book.〉 + 〈I am NOW reading a book.〉という空間的・時間的な文の合成という考え方である。6), 7) それぞれの波線部 *there, now* もその顕われと言える。英語の *I am reading a book.* をスペイン語では *Yo estoy aquí leyendo un libro.* (=I am here reading a book.) のように *aquí* (=here) とともに表現するのは普通でもあるが、このあたりの事情を裏付けるものと言える。 *allí* (=there) ももちろん起こる。-ing 接辞による進行形の背景にも *HERE, THERE* があるということである。この作品の 14 章に次の 8) のような文がある [下線は筆者]。

8) ... and his eyes were bright and he was there looking straight at Finito.

cf. ... and his eyes were bright and he was looking straight at Finito.

この場合 8) での *there* は省き、単に cf の文でもよいわけである。

Hemingway の小説 *For Whom the Bell Tolls* を素材とし、遠近法に基づく情景・状況描写における移動と付帯状況 AC と準付帯状況 QAC を見てきたが、その基本の把握のためには、

やはり簡素な形態で透かし見られる Basic を尺度にするのがよい。以下、いくつか Basic 文を介した具体例で焦点を定めてみる。

- ㉑ I'll go down this way to Tokyo Skytree.
- ㉒ He was walking the wrong way down the mountain then.
- ㉓ The *autobus* came about halfway up around the curve in the road, and then it came to a sudden stop. (Note: *autobus*; International word)
- ㉔ I was threading my way through a number of men and women to Shibuya station.
- ㉕ She gave a look far out over the sea at the lighthouse.
- ㉖ They came back round through the woods to our place. cf. They came back round the woods to our place.
- ㉗ Mary put the books away from here and put them there onto the shelf.
- ㉘ John was putting things out of his pockets into the bag.
- ㉙ The train is moving between Tokyo and Yokohama at the rate of sixty kilometers an hour.
- ㉚ He gave the door a push. cf. He is giving a push to the door. / He is pushing the door.

上の㉑～㉔の4つはすべて way を用いる空間移動に関わる描写文であり、今日的に言ういわゆる way-constructions (way 構文) である。移動経路 P を象徴する本節冒頭で触れた移動事象 ME の原始構造型に、〈WAY〉も意味素として組み込まれていると言えよう。㉑～㉔ではそれぞれ down this way, the wrong way down, about halfway up around the curve in the road, my way through a number of men and women と way が明示化された形でその経路 P となる。

㉑では Tokyo Skytree が着点 G であるが、㉒では着点 G は示されない。㉓は停止 (stop) した位置が事実上の着点 G となる。㉔は Shibuya station が着点 G である。way 構文で経路 P の意味素としての〈WAY〉が way として明示化される場合は、その経路 P をすべて塗りつぶすような移動の描写法となりそれだけ明確化されるが、実際には way として明示化されないことのほうが多い。

㉕、㉖はそれぞれ far out over the sea, back round through the woods が経路 P、そして the lighthouse, our place がそれぞれ着点 G となる。㉖の2つの文の意味の相違には注意を要する。through のない cf. の文は、the woods (森) をくぐってはいない。なお、through はこの場合 across で代用はできない。through は wood (s) など3次元空間の貫通であり、across は2次元空間の横切りで across the street/ the field (s) / the garden/, etc. となる。

㉗では here と there の間が経路 P となり、着点 G が the shelf である。㉘はこの語句整序が自然である。pockets が things の移動の起点 S で、putting things は into the bag と結合し着点 G の the bag に比重のかかる end-focus (文末焦点) となる。経路 P は、his pockets と the bag の間となる。指示対象の number (数) が1か否かも重要な指標 (marker) となるが、この例はポケットの数は複数で、カバンの数は単数である。

㉙と㉚に関しては特別に触れておきたい点がある。まず㉙は基本的な文であるが、実はここでの趣旨の本質的な面とも絡んでいると考えたい。この例では起点 S と着点 G は視点 (point of view) が定まらない限り定まらないし、同時に経路 P も定まらない。この場合速さが毎時 60 km であることが、刻々と列車の走行している地点 (position) を定めることになる。

すなわちこれは、そもそも移動事象 ME が速さ (s)・時間 (t)・距離 (d) の3つの関わるモノ・コトの change event (変件事象: CE) を合わせもつことを示すものとなる。移動描写の表現でこの3つが明示化されることはまれであるが、 $d = st$ ($s = d/t$, $t = d/s$) という数理方程式が潜在している。①の例のように毎時 60 km で、列車が 15 分走行 (移動) したとすれば当然のことながら距離 $d = 60 \times 1/4 = 15$ (km) で、列車は東京駅または横浜駅からみた 15 km の地点を走行している状態へと変化している。そしてその 15 km がその地点までの列車の経路 P となる。

一般に移動描写で空間詞 between を用いる between ... and ... ではなく、from ... to ... となると from と to の間の項がそれぞれ 1 つの場合は from の後ろの項が起点 S で、to の後ろの項が着点 G と当然なるが、from と to の間の項は常に 1 つとは限らない。from A, B and C to D and to E のような移動描写もある。そういう場合は A, B, C がそれぞれ起点 S で、D が経路 P となり、E が着点 G となる。他にもいろいろな場合がありうる。

たとえば from A, through B, through C, through D and to E という言い方もあるが、その場合は A が起点 S で、B, C, D が経路 P であり、E が着点 G となるが、これは本節冒頭で提示した、移動の原始構造型における意味素 (PAST) が表層上に through としていくつも顕現した例となる。(PAST) はすでに見てきたように past をはじめ、本来は 3 次元空間の移動である through や、また up, down, across, over, etc. の空間詞となって移動の経路 P、すなわち遠近情景的には中景 MED を描写するが、un-Basic な along などとしても顕現する。

ついでながら、この①の例のように線路上の一定の経路 P を移動する列車が「走行している」ことは英語で The train is moving. と言い、running は不可である。否定形で The trains are not running. は「運休状態」の意味であり可である。また現在形などの The trains run every twenty minutes. 「列車は 20 分ごとに出る」は「運行」のことであり、やはり状態で可となる。

ところでこのあたりの事情とも絡むが、incremental theme (漸増対象) という考え方を 1990 年代初頭にアメリカの D. Dowty が提起した。モノの位置変化 (location change) とコトの状態変化 (state change) を表裏一体としてとらえる考え方と言ってよかろう。これは裏を返すと decremental theme (漸減対象) ということでもあり、incremental/decremental theme (漸増減対象) と言えばよかろうが、これまた表裏一体で一方が徐々に少しずつ増加すれば他方がそれに伴って徐々に少しずつ減少する状態となるという考え方である。

いわゆる動詞 V の direct object (直接目的語) は、基本的にすべて漸増減対象項となる。たとえば「肉を食べる」「酒を飲む」「階段を上る」「手紙を読む」等々はその消費分量が徐々に増加すれば消費されてない分量、すなわち食べていない、飲んでいない、上っていない、読んでいない対象物の部分は徐々に減少する。部分と全体の関係でもあり、先に触れたところがあるが、ここでも微積分の考え方を想起させる。

最後の①はこれと絡めて考えると理解しやすくなる。この例では give の tense (時性) と aspect (相)、さらに直接目的語 (DO) である the door の pragmatic (語用論的) な telic role (目的役割) が絡んでいる。すなわち、そもそもドアなるものは「閉まっている状態にある」のが本来であり、その状態が出発点となる。欧米ではエレベータなどにもドアを開ける目的のためのボタンはあっても、閉めるほうのボタンは一般には設置されていない。自動開閉のドアで閉めることを示すことはあえて必要はないという考え方となる。このあたりは文化的な側面

とも絡め注目しておいてよい。ドアは push や pull することで開閉するものであるが, tense が現在形で aspect が未完了相の場合は push や pull によりドアに圧力は与えられても実際には開閉までは含意しない。開閉する場合もあればしない場合もある。push により閉まり, pull により開くドアもある。cf. の文 He is giving a push to the door. は, 変件事象 CE の The door is open/shut. という状態変化までは含意しない。これは He is pushing the door. でも同じである。



He is giving a push to the door.
The door is open now.

English Through Pictures, Bk 1, p.59, Richards, I.A. and Gibson, C.M. (1945).

上の挿絵は is giving a push でたまたまドアが開いた場合を示しているが, 本来 give は移動の弾み・勢い (momentum) を与えるだけである。ドアの開閉では, give によりその変化状態まで含意されるのは tense (時性) が現在形の give ではなく, 時間的推移を伴った現在 (過去) 完了形の has (had) given か過去形の gave のときで, aspect (相) が完了相のときと言える。そのときは移動事象 ME が変件事象 CE として理解され, 語配列が逆転し He gave the door a push. と間接目的語 (IO), 直接目的語 (DO) の順の語整序となり, ドアの push による affectedness (被影響性) が前面に出ることで「開閉状態」に変化したこととなる。The door got open/shut because he gave [had given] it a push. の意味となるということである。したがって *He gave a push to the door. などとは言えず, これは non-sentence (非文) となる。さらに言えば, そもそも「何かを何かに付与すること」を意味する give は aspect 的には完了相の動詞ではなく, また motion event (移動事象) 的にも変化の結果までは含意しない語であり, 方位を示す空間詞 to と共起して to-与格構文となる。一方, 間接目的語と直接目的語を並列する対格構文では変化による影響を被る [affected (被影響性)] という意味特性が付与され, 変化の結果としての状態の意味となる。なお, to-与格構文と対格構文のどちらが unmarked (無標) かであるが, やはり前者のほうがだと思いたい。

この挿絵は i) He is giving a push to the door. → ii) He gave the door a push. → iii) It is open now. という移動事象 ME/変件事象 CE を示しているが, ii) のような文を踏まえての提示でもある。漸増減対象項は the door であり, これが移動事象 ME 的には着点 G であるが, 変件事象 CE 的には具体的に何が漸増減することで結果的に変化状態になったか? である。ここでは物理的圧力による the door の移動距離の漸増減ということで, この場合はそれが〈開〉状態へと変化したという言い方をしておこう。push/pull 式で一般に 90 度の円弧を描き開閉するドアの場合, その円上の移動経路 P は数理的に 2 つの変数 x, y において, x の値が定まれば y の値が 1 つだけ定まる関数方程式 $y = f(x)$ と, その微分関数方程式 $y' = f(x)$ に原理的に支配され決定されることになる。さらに関連し He pushed the door open. などとなり表層上に具現する un-Basic 文にも注目しておいてよい。

なお, すでに示唆したことになるが, この文も deictic (直示的) な 〈BE-AT (WITH) HERE / THERE〉からすれば, スペイン語では Él está aquí [allí] empujando la puerta. (= He is here

[there] pushing [giving a push to] the door.) などと aquí (= here) / allí (= there) + -ando / -iendo (= -ing) の言い方となっても現われるし、さらに言えば、英語でも He is giving a push to the door. は He is here [there] at the door and he is giving a push to it. とか、 He is here [there] at the door (,) giving a push to it. のように直示的に、そして状態的に描写できる。

ここで push や pull することによるドアの開閉に関連してもう 1 点付け加えておくが、un-Basic の次の 9) のような言い方もよく用いられる。

9) He pushed/pulled the door to. 「彼はドアを押して／引いて閉めた」

この場合の末尾の to は副詞で、「もとの状態にもどすこと」の意味をもっている。to は to its normal condition のようなものから来ていると考えればよかろう。この 9) は上で触れたように、押したり引いたりして「ドアの本来の状態にもどした」の意味から「閉めた」の意味となる。「開けた」ではない。For Whom the Bell Tolls の 18 章に次の 10) の例がある〔下線は筆者〕。

10) ... He had pulled the heavy side door to with a slam and locked it ...

文中に to が出てきているが、これは引いてドアが「閉」（「開」ではなく）となることを示す好例である。9), 10) の時制はそれぞれ過去、過去分詞であり、アスペクトは両者とも完了相である。

次にやはり Basic 文を介しての時間的で曲線的な付帯状況・準付帯状況 AC/QAC の思考法に焦点を移すが、この思考法に慣れるための手法としては、後藤 (2014 b) でも似た例で示唆したが、次のように普通の叙述文を AC/QAC として見立て変換するステップを経るとよい。

- ① I am here. ⇒ <with me here>
- ② You are watching me. ⇒ <with you watching me>
- ③ The competition was rained out. ⇒ <with the competition rained out>
- ④ Their decision is still uncertain. ⇒ <with their decision still (being) uncertain>
- ⑤ Others came late. ⇒ <with others coming late>
- ⑥ His hat was down over his eyes. ⇒ <with his hat down over his eyes>

日本人のやはり不得意とする付帯の状況描写は、これら①～⑥のような変換法を通し、叙述文を付帯状況・準付帯状況 AC/QAC として処理し変換する手法を採用することで、その表現法に慣れることができるはずである。付帯状況部分は先の図表でマトリックスとして示した WOM に組み入れるだけで自動的に語整序されていく。③の叙述文 The competition was rained out [off]. は「試合は雨で流れた、中止（順延）となった」の意味で、これは Basic の範疇と考えてよいが、仮に難点があれば拡張 Wider Basic と見なせばよかろう。The competition was put off because of the rain. と言えば問題なく Basic の範疇となる。

上の①～⑥は、たとえば次のような SIT-SEN (situational sentence) がいくつも生み出せることになる。先のマトリックス (WOM) に従ってすべて with を用い、あるいは場合によっては with を空 (φ) にして言える。

- ① With me here, they would say 'yes' to it.
- ② With you watching me I am unable to do it all right.
- ③ With the competition rained out nobody is here.
- ④ With their decision still uncertain we have no idea what to do now.
- ⑤ Mary came first, others coming five to ten minutes later.

⑥'John came into the room, his hat down over his eyes.

ここでの⑤'と⑥'は with を ϕ とした例であるが、with は任意である。⑤'で前半部と後半部の逆配置は時間的推移の点から不可。⑥'もこの語句の整序が本来である。叙述文からの付帯状況変換例をさらに次に列挙しておく。もちろんすべて Basic である。

① He is helping me. \Rightarrow \langle with him helping me \rangle

② They are working together. \Rightarrow \langle with them working together \rangle

③ His hair was combed back and his thick neck was looking short. \Rightarrow \langle with his hair combed back and his thick neck looking short \rangle

④ The committee is fixed for Monday. \Rightarrow \langle with the committee fixed for Monday \rangle

⑤ Feb.13 will be the likeliest day for the meeting. \Rightarrow \langle with Feb.13 being/seen the likeliest day for the meeting \rangle

⑥ The ruling is to be handed down on Dec.10. \Rightarrow \langle with the ruling to be handed down on Dec.10 \rangle

次に日本語との対比により、客観的な指示的状况描写で AC/QAC として処理する Basic 文による SIT-SEN の例を提示してみる。

⑦ 1階と2階から煙と炎が出ていて、ビルは大損害を受けた。

There was a great damage to the building with smoke and flames coming out from the first and second floors.

⑧ 会合では何人かが彼の考えに反対で、一人は「それは日本式経営だ」と言った。

In the meeting some of them were against his idea, with one saying, "That's the Japanese way of doing business."

⑨ 当日は10号館の5階で特別な催しとして、午後1時半からは戦時中の従軍慰安婦問題による日中関係の悪化に関するジョン・スミス氏の講演があります。

On that day there will be a special event at 1:30 p.m. on the fifth floor of Building No.10, with Mr. John Smith giving a talk on Japan-China political troubles over the question of war-time comfort women.

⑩ 彼女はそこにじっと静かに座っていて、何も語らず、表情は憂いに沈んでいた。

She was seated there quietly, saying nothing, her face clouding.

これら⑦～⑩のそれぞれに説明を加えることは割愛するが、特に最後の⑩のような例は小説に頻出する。sayingの前に代名詞 she の目的格 her (\langle with her saying \rangle) が文脈上明らかで埋没するが、ときには誤解を避ける目的で浮上することもある。その場合は強調の意味ニュアンスも出る〔主格の she となることもあり先の7)の文中の... ; he circling... はその例である〕。柔軟な英語思考のために、日本人はどうしても英文に支配的に現われる上例のような付帯状況描写法にも慣れる必要がある。その手順は文レベルにする前段階として、まずは①～⑩のように AC/QAC 部分のみに照準し、その思考法を鍛えるのが手早い。後藤(2014 b)の着眼点の1つもこのあたりである。さらに次に⑪として端的にそういう部分のみのBasic例を数例加えておく。

⑪ with one out, and the bases full (ワンアウト, 満塁) / with the runner on second, and two outs (ランナー二塁, ツーアウト) / with one out in the second half of the seventh, the runners on first and third (七回の裏, ワンアウト, ランナー一塁・三塁) / with Hakuho

pushed out of the ring and Harumafuji pulled down (白鵬, 押し出し負け・日馬富士, 引き落とし負け) / with Terunofuji forcing Kakuryu out (照ノ富士, 鶴竜を寄り切り勝ち) / with yokozuna Hakuho sidestepping at the jump-off (横綱・白鵬, 立ち合いで横へ変化) / Terunofuji ... , with his arms folded up against Kotoshogiku at the face-off (照ノ富士, 立ち合いで琴奨菊をかち上げ)

いずれもスポーツの野球, 大相撲での状況描写例であるが観戦中のとき進展状況をその都度心の中でつぶやけばよい。ゲームなどはルール(規則)のもとで刻々と状況が変化し, 常にその進展のなかで時間的に「前」・「後」・「同時」のものとして付随する状況があり, 文字どおり付帯状況 AC/QAC そのものがそのゲームだという言い方もできよう。遠近法的には, すでに触れたが, やはり近景としての描写ということになろう。

最後に実践面から一言触れておくが, 英語の遠近情景/状況描写法に習熟するには, 日頃から街の中を歩いているときなど折に触れ, その自然風景・情景・状況を心の中でつぶやく方法がある。これを「1人でできる街歩きの英語修得法」と呼んでおくこととしたい。その理論的な背景が本稿の趣旨だと考える。

あとがき

E. Hemingway の長編小説 *For Whom the Bell Tolls* の冒頭書き出しは, 本稿第1節の1) で引き合いに出したように He lay flat on the brown, pine-needled floor of the forest, his chin on his folded arms, and ... という情景・状況描写で始まる。これに関連し1つ触れておきたい点がある。それはこの文での「腕組みをすること」に関わる言い方である。

これには特別な思いが筆者にある。アメリカの大学院に留学していたときのことである。付帯状況表現などをタイプ打ちした(もちろん当時はタイプライターの時代であるが)研究課題の提出ペーパーをもってある日, 指導教授の研究室を訪れた。ペーパーを見せると「これは絶対に言えません」とこの指導教授からコメントされたのである。実はそれが, 室(1964)の across の箇所の例文 He is standing with his arms across. を参考に, standing は Basic 語ではないので少し改作した He is seated at the table with his arms across. という文であった。

室(同上)の例文には解説があり, 《with his arms across は「両腕を交わるようにして」すなわち「腕ぐみをして」ということです》(原文通り)と書かれていて, 例文とこの解説を含めると with his arms across が2度出ているし, 一瞬なぜ言えない?とは思った。しかしその時は特には深く考えずこの文はペーパーから削除した。

その後に分かったのであるが, 理由は本稿で扱った趣旨とやはり関わっている。これは He is seated at the table with his arms across his chest. ならよい。with his arms across では his arms の着点 G が示されず, 文としては宙吊りとなるわけである。この場合の着点 G は his chest である。his chest がどうしても必要である。これは簡単には, たとえば He is there. が He is over there. とは言えても *He is over. とはこの場合, 言えないようなものとも平行する[*non-sentence (非文)]。両腕を up, down, across などいろいろな状態にすることはもちろんできるが, いわゆる「腕組み」の意味にするには across の着点 G としての chest の明示化が英語では必要となる。

空間移動事象 ME の経路 P の意味素〈WAY〉を導入して考えれば, 〈his arms MAKE their

WAY across his chest) から変化事象 CE としての結果状態 (his arms BE across his chest) へと移行するわけで、「腕」の着点 G が明らかにされ「腕組み」の意味となる。

この「腕組み」を across で言う場合に、名詞の chest (胸) がこつ然と浮上するところが味のあるところである。これは He is seated at the table with his arms folded. でもよい [p.48, 4 行目の例参照]。また所有格の his なしで ... with folded arms. でもよい。所有格を用いると叙述的となる。full English なら He is seated at the table with his arms crossed. でもよい。fold, cross など動詞 V が完了分詞形 -ed に変化し「状態」となれば移動の完結性が含意され、着点 G が固定し「腕組み」の意味となる。spatial particle (空間不変化詞) の across では着点 G まで至らず無理である。

上の冒頭書き出し文中で、with が空 (φ) となった付帯状況部分 his chin on his folded arms 「腕を組み合わせそこに顎をのせて」の例を第 1 節の 1) でスペイン語での言い方とともに見たが、スペイン語で「腕組み」は con los brazos cruzados (= with the arms folded) が常番表現で完了分詞 cruzados (= folded) となり、これが移動事象 ME 的に着点 G を組み込み変化事象 CE となる。末尾で across となる英語例として Get your idea across. 「あなたの考えを伝え理解させなさい」などがあるが、これは ... across (to him, them, etc.) を背景にしていると考えてよく、着点 G は踏まえらるる例である。また付帯状況 with his hat on などが ... on his head と着点 G が pragmatics (語用論) 的に理解される例はいくつもある。なお、「脚組み」をしている状況なら with one leg over the other などとよく言う。

上記書は応用編で、1964 年の東京オリンピック開催の年の直前に出た。それより先に出た正編とともに Basic の優れた入門書である (正編・応用編とも当時の版が手元にあるが評論社刊、判は新書判ではなく、よりサイズの大きい B6 判、そして定価が正編¥280・応用編¥230 であった) が、この例文と解説は率直に言ってまずかった。ただ、こういった誤りの 1 つや 2 つだけで本書全体の評価は何も下がりはしない。実はそれよりも気になるのは、音声収録時のネイティブ吹き込み者の気持ちである。どういう思いだったのかに関心がある。今回、改めてこの箇所を再生し確認してみると、そのまま吹き込まれている。またこれとは別に、吹き込み者の一瞬の躊躇・言い淀み箇所もあり当時から気になったが、これはなぜだろう？ Basic 表現を叩き台に、自然さの観点から「意味的自然さ」と「慣用的自然さ」の両者間の問題追究は意義がある。

Basic はシンプルできわめて透明度が高いゆえ、決してごまかしがきかないようにできている。そこが一方で難しい。しかし熟達すれば数理方程式を用いて文章題を手順を追って正しく解くように、full English よりも概念規定の明確な Basic English のほうがのりも定まっいて、場合にもよるが基本的には事実上はるかに簡便で、自信をもって使えるようにもなるはずと考える。特に事柄の趣旨を的確に言い表すときなどにその威力を発揮する。Basic English はそのようにできている。

関連して筆者は何年か前に、Basic で書かれている *Stories from Okinawa* 『沖縄民話』(F. J. Daniels 著) の全文の録音吹き込みを、大学の同僚で舞台芸術の町ニューヨーク生まれの戯曲・演劇 (drama / theater) が専門のアメリカ人に依頼したことがある。相当量あるが、この書で Basic 文の自然さと慣用性の相互の問題を検証したかったわけである。彼は自分の専門分野からも興味を示し快く引き受けてくれ、まるで何も言い淀みなく全文の吹き込みをした。あと

で英文そのものの不自然さなど何も口にしなかった。何ら違和感をもたなかったようである。この音源も今なお筆者の手元にある。

本稿では遠近法による情景・状況描写を、Hemingway の作品としてはやや文体上で難しいほうに入る長編物 *For Whom the Bell Tolls* を題材としたが、これも徹底的に Basic で培った語法・構文力と 850 語を基本とする最小限の語彙力だけをたよりに、80% 以上は理解できると考える。Basic をよりどころに、広く英文を音声とも絡め読み・理解するその具体的方法に関しては、後藤 (2016) で詳細に扱った。一般に、飾りの多い美辞麗句 (pompous word) とともに、くだけた語法 (informal usage) が用いられ、相当な英語力の必要な文学作品の解釈・理解にも 850 語で世界を解き表現する、ごまかしのきかない Basic / Wider Basic の方法 (methodology) は、中立 (neutral) な意味測定の尺度・ものさしとして確固たる有用性をもつ。英字紙などの文を読むのとは異なり、文学作品の英文で次々と連続する各語の整序法が抵抗なく受け入れられ、ネイティブ並みの速度で読んで理解するのは日本人には容易ではないが、納得のいくまで、リズムに乗った「耳で読む」反復リーディングで語感と音感を培い、鍛えていくということになる。彼らの理解法が感知できるまで反復読みをするということである。文化的・思想的にはキリスト教が背景にあり、聖書内容の理解はもちろん前提となる。

最後に改めて付け加えておくと、英語で書かれた文学作品の解釈に、言語学的な側面からの見方も特にノンネイティブには欠かせないが、Hemingway の作品はどれも英語の「語」そのものの用い方を特別に強く意識して書かれ、まさに言語学と文学の領域の接点をいく、昨今の最も新しいジャンルとしての英語文学 (English-language literature) を象徴するものと言えよう。

参考文献

- Aguado, Lola de. (1969) *Por Quién Doblan las Campanas*. E. Hemingway, *For Whom the Bell Tolls*, 1940 (Traducción al español), Editorial Planeta, S. A.
- 後藤 寛 (2014 a) 「Intertextuality (間テキスト性) から考える Wider Basic English」 *Year Book*. No. 66, pp. 3-18. GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会
- 後藤 寛 (2014 b) 『学び方を学ぶ 850 語プラス α の英語』 (*Learning English in the Basic Way*) pp.80-82. 松柏社
- 後藤 寛 (2015) 「Basic / Wider Basic と Ernest Hemingway の作品言語」 *Year Book*. No. 67, pp.25-40. GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会
- 後藤 寛 (2016) 『必携 最小限の語彙力で英語を読み、聴く方法 — 基礎語からの類推』 (*Getting the Root Sense of the Basic Words of English*) 松柏社
- Hemingway, E. (1940) *For Whom the Bell Tolls*. Arrow Books, 2004.
- 室勝 (1964) 『500 語のできる英語会話・応用編』 p.44. 評論社
- Richards, I. A. and Gibson, C. M. (1945) *English through Pictures*. Bk. I, p.59. Washington Square Press, 1945.

8. Who is poor?

Chiba Yoko

José Mujica was President of Paraguay from March 1, 2010 to March 1, 2015. He seemed quite different from any president or ruler on the earth.

Out of the payment he got from his work as president (about US\$12,000 monthly), he gave about 90% chiefly for housing programs for unmarried mothers. He was living with only US \$1,200. "It is enough for me", he said. "I am living as common persons in my country. Most of persons forming nations are not living as their rulers are." Not in the beautiful president house in the town, he was living (and is living) in a small, simple farm house outside the town, with Lucía Topolansky, Senator, his long-time like-minded partner. No housekeeper was in the house. Only two policemen and a three-legged dog Manuela were keeping watch. When he had time, he was on part-time work as a farmer planting flowers and vegetables. Frequently, he was seen driving by himself his small automobile made in 1987 for going to and coming back from the President Office in the town.

He was said to be "the poorest president on the earth". But he was saying, "I am living simply, but I am not poor. The poor are those who have a desire to get more and more, not those who have little." "We get things not in exchange for money but in exchange for the hours needed to get that money. Our existence is short and we are soon coming to our end. We are not able to get existence in exchange for money. It is sad if we are wasting our time of existence." "No one is pleased from being poor. I only have a desire of having little and living simply. Then I have time for myself."

Mujica was given birth in 1935 in a poor family. He was faced with his father's death when he was 7 years. From 1960 s to 1970 s, he was a member of a leftist armed group fighting for well-being of his nation against the then government. He was shot 6 times and seriously wounded. He was put in prison more than once, and in all for almost 14 years kept in prison. He was freed in 1985 when his country got back democracy. In 1999, he got a seat in the National Assembly. In 2005 he became Minister of Agriculture, and in 2010, President.

You will get Mujica's pictures and his words on the Internet. Not putting value on his looks or clothing (he never puts on a tie), Mujica is seemingly an old working-class man or farmer. In fact, he is a man of beliefs and his full-hearted talks have got agreement of a great number of persons.

Now, let's see one of his talks given at a top-level meeting: United Nations Conference on

Sustainable Development, Rio+20, which took place in Rio de Janeiro, Brazil, June 20 to 22, 2012:

“Authorities present here from the countries all over the earth, thank you very much. I am very much pleased with strong beliefs of the representatives who have given talks before me. We have made clear our thought we have in common as rulers.

“However, let us put some questions in a loud voice. All the afternoon we have been talking about earth-friendly development, that is, development in which the use of natural resource is kept at an unchanging level not likely to give damage to the environment, and we have been talking about giving help to the masses who are in great need. What comes up in our mind? A current example of development and using-up in the well-off societies? Then I will put this question: What would come about on the earth if each family of the Asian Indians had the same number of automobiles as that of the Germans? How much oxygen would we have to take a breath?

“More clearly: Does the earth today have natural materials enough for 7 or 8 billion persons to have the same degree of producing and using-up as the most well-off western societies? Will it be possible? Or, do we have to do another sort of discussion? We have made this society in the high stage of development. It is the offspring of the market and competition. It has given us chances of important headway. But the market economy has made market societies. And it has given us the idea of viewing all the countries on the earth as one body, that is, being conscious of all over the earth. Are we ruling the earth or is the idea of viewing all the countries as one body ruling us? Is it possible to have talks on the idea of “we are all together” in a society based on heartless competition? Is it possible for us to be friends, and to give help and support one another?

“I am not saying that this meeting is not important. Quite the opposite. The problem we are faced with is of a great scale. The great danger is not in the environment. It is a political danger. Today man is not ruling the forces which he has made up, but the forces made up by him are ruling him and his existence. It is not that we came to the earth simply for development. We were given birth on the earth to be happy. Because our existence is short and quickly goes away. No property has more value than our existence, and this is very important. But if your existence is going away while you are working and working for getting overtime payment and using it up? Because the using-up society is like an engine. It is certain that if this engine is stopped the economy is slowing down, and if the economy is slowing down the society will be kept unchanged without development.

“But it is this great amount of using-up that is attacking the earth, and we have to make things not strong enough for long-time use because we have to put more and more things on

the market. An electric bulb does not keep for more than 1,000 hours. Yes, there are some which keep for 100,000 hours, or even 200,000 hours, but they are not made. The reason is in the market. Because we have to keep on working to give support to the society of “using and putting away”. We are in a wrong and cruel circle of events.

“These are questions of political quality pointing us that now it is necessary to get started fight for another culture. It is not that we have to go back to an existence in the cave like in early times, nor to have an example of underdevelopment. We do not have to be ruled forever by the market, but we have to be ruling over the market. That is why I say the question is of political quality.

“The old persons of thought, Epicurus and Seneca, and Aymaras (persons living in the highlands of Bolivia and Peru), said: Poor is not the person who has little, but truly poor is the person needing more and more and having a desire to get more and more. This is an important key from the point of culture.

“I have respect for the effort and the agreement which have been made, and I am with you as a ruler. Some part of what I am saying may be unpleasing, but we have to be conscious that the cause is not the danger of water, nor the danger of attacking the environment. The cause is our society which we have made, and what we have to look into with care is our way of living.

“I am from a small country having a great amount of naturally produced things enough for living. In my country about 3.2 million persons are living. But we have about 13 million cows, the best cows on the earth, and about 8 to 10 million very good sheep. My country is exporting food, milk, milk products and meat. It is a flat country, and almost 90% of its land is fertile.

“Workers in my country had hard fight for getting eight-hour work, and now they are getting six hours. But the one who got six hours is doing another work. Why? Because he has to do much amount of payment for things he got: motorcycle, automobile..., making monthly payments endlessly. After a while, he will see that he is a rheumatic old man (like me) and his days are coming to an end. And he puts this question to himself, “Is it the future of man’s existence?”

“What I am saying is quite simple and natural : It is not right that development is against our happy existence. It has to be for our happy existence, for love on the earth, for good relations among persons, for taking care of little ones, for having friends, and for having necessary things. Truly, that we are happy is of great value. When we do fight for environment, we have to keep in mind that the most important thing is our being happy. Thank you.”

From:

悪役 世界でいちばん貧しい大統領の本音。アンドレス・ダンサ他, 汐文社, 2015年10月

世界でいちばん貧しい大統領からきみへ。くさばよしみ編, 汐文社, 2015年10月

<https://www.youtube.com/watch?v=ezofj2ydzz4>

<https://www.youtube.com/watch?v=YFSmaztcP4c>

<https://www.youtube.com/watch?v=hteGnL-8SeU> and other related links.

(写真は、編集者が挿入)



Jose Mujica: The world's 'poorest' p resident 元大統領ムヒカ氏は4月に来日した。

9. 英語力

齊藤直美

中日新聞（2月3日付）に、「中3英語力 目標届かず」「英検3級程度 20~43%」という記事があった。「英語力」は、英検の数値だけで測られるのか？ 文部科学省が目指す、望むところの英語力とは、いったい何なのか？ 英検のテストの四技能にすべての目標が置いてあり、その目標数値に達すれば、「英語力があり」、達しなければ「英語力がない」と判断されてしまう。そもそも「英語力」とは何か？ もちろん、「読む、聞く、書く、話す」の四技能は必要である。それが100%達成されなければ、英検に合格しなければ、「英語力がない」と決めつけられる、そのシステムがおかしい。ところが逆に、今の世の中、英検1級合格、TOEIC 900点あれば、「英語力がある」とみなされる風潮があり、実際、英語関連の仕事探しの時、例えば通訳、翻訳の仕事をしようと思えば、資格として求められる。しかしながら、資格として英検1級合格や、TOEIC 900点を持っていなくてもそれに匹敵する英語の実力があることはありうる。その実力は数値のみで測られるものではないはずだ。通訳の現場で、例えば、自動車の製造工場での研修通訳や、座学での技術通訳、テクニカルな内容を議論する技術通訳、技術者間の会議通訳、顧客との商談通訳など、様々な分野で通訳者、また翻訳者として、英語力を働かせて仕事ができれば、そしてして言えば、それにより報酬が得られれば、それは「英語力がある」ということだ。英検1級合格、TOEIC 900点を持っていても、ここで要求されるに十分な英語力があるとは言えない。通訳の現場で、通訳者として必要な英語力が発揮できることは、経験や知識の積み重ね、努力のたまものであり、英検や、TOEICの数値で測れるものではない。

例えば、「話す」ことは苦手でも、「書く」ことが得意であれば、翻訳はできるかもしれない。「書く」のは下手でも、「話す」のが得意であれば、例えば帰国子女だったり、留学経験があれば話すことには慣れていて、ある程度の通訳としては役に立つかもしれない。英語を教えることも可能である。教えるに十分な知識や、素養は持っているが、耳が良くて、「聞く」のが得意であれば、英語を聞いて聴き取りができるかもしれない。英語による会議や説明などの「テープ起こし」などができるかもしれない。それらも「英語力」と言えるが、プロフェッショナルな通訳者、翻訳者としても技量があるとは言えない。

英検やTOEICの数値だけで示される英語力だけではなく、これらの「読み、聞く、話す、書く」の四技能が、総合的に、実用として働くことが「英語力がある」と言えるのである。

例えば、ご近所にいる外国人と英語で挨拶したり、日常会話を楽しめれば、それも英語力があると言える。外国人の友人と、手紙やメールでのやり取りができれば、それも英語力があると言える。その実用で働く英語力のレベルはさまざまである。文部科学省が書いている目標は、あくまで数知的レベルであって、実用に働くレベルは表示されていない。英検1級合格、TOEIC 900点は、単なる英語力の目安である。それが「英語力のある」オールマイティな目安にされるのはおかしい。

◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2014年8月～2015年7月)

■2014年

8月11～13日	夏期英語教授法セミナー	オリンピック記念青少年総合センター	
9月27日	月例会	神奈川県民センター	
	デモ	“Getting About” The Basic Reading Book 3 p.17	菅生由紀子
	Basic	Basic English/400 General より (s) -2	
10月25日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	part (EP 1, 45)	加藤 准子
	Basic	Basic English/400 General より (s) -3	
11月29～30日	秋のセミナー／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
29日	デモ	before/after (EP 1, 82-83)	唐木田照代
	トーク	「学校の現状と今後の課題～GDMの使命とは」	伴野 温子
12月21日	月例会	津田塾大学同窓会会議室	
	デモ	may (EP 2, 63)	黒瀬 るみ
	トーク	「Basic English あれこれ」	相沢 佳子

■2015年

1月17日	月例会	目黒区田道住区センター	
	デモ	who (rel.) (EP 1, 111)	服部 正子
	Basic	Basic English/400 General より (s) -4	
2月7～8日	ベーシック・イングリッシュワークショップ／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
7日	デモ	“A bear-like Indian animal and a bottle of ink”	小林 由明
	トーク	「人間の記憶について —いつでも取り出せる記憶をつくろう」	新井 等
3月28日	月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	have (EP 1, 42)	大野 晴美
	デモ	before (前置詞から接続詞へ) (EP 1, 46)	服部 正子
4月25日	月例会	東京芸術劇場・小会議室	
	デモ	off, take (EP 1, 14)	高原 秀明
	Basic	Basic English/400 General より (t)	
5月23日	月例会	三田いきいきプラザ	
	デモ	by/ be going to/ journey (EP 2, 2-3)	多羅 深雪
	トーク	Gatenby and Basic in Fukushima, Japan	飯嶋 良太

5月30～31日	GDM 発音ワークショップ	オリンピック記念青少年総合センター	
6月27日	GDM 公開セミナー	すみだ産業会館	
	1) 1時間目をどう教えるか	(I, You から here, there まで)	黒瀬 るみ
	2) 動詞をどう教えるか	(put を中心に)	伊藤千津子
	3) 前置詞をどう教えるか	(between, over, under を中心に)	加藤 准子
7月25日	月例会／総会	東京芸術劇場・小会議室	
	デモ	washing/drying/brushing/combing (EP 2, 2-7)	合川 麻由

◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2014年9月～2015年8月)

■2014年

9月23日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ①	when (conj.) (EP 1, p.72.75)	山崎 典子
	デモ②	keep...from doing (EP 2, p.85)	河村有里子
	Basic English 勉強会「TRUE STORIES about BEES」		
10月26日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ①	here, there (EP 1, pp.4-7)	上島 光代
	デモ②	off-take (EP 1, p.14)	松川 和子
	Basic English 勉強会「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」 後藤 寛著 松柏社		
11月15日	GDM 秋セミナー in Osaka 大阪市立総合生涯学習センター		
12月14日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ①	before/after (EP 1, p.46)	上島 光代
	デモ②	(EP 2 pp.233-234)	松川 和子
	Basic English 勉強会「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」		

■2015年

1月18日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ①	who (EP 1, p.111. 112)	山崎 典子
	デモ②	seem (EP 2, p.103)	此枝 洋子
	Basic English 勉強会「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」		
2月21日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ①	before/after を中心に (EP 1, p.82-83)	河村有里子
	デモ②	how much～? (EP 2, p.14)	麻田 暁枝

	Basic English 勉強会「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」	
3月14日, 15日	初級・中級セミナー IN KYOTO／月例会	
	ザ・パレスサイドホテル (京都)	
	デモ① go up (EP 2, pp.47)	田中 大介
	デモ② (EP 3, p.20)	佐藤 正人
	トーク 『リチャーズの謎の言葉』	片桐ユズル
4月19日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① 疑問文の練習 (EP 1, p.42-44)	上島 光代
	デモ② Happy Reading (Reading 11)	山崎 典子
	Basic English 勉強会 Basic English とは	片桐ユズル
5月31日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① I, You, He, She, It (EP 1, pp.1-2)	上島 光代
	デモ② This/That (EP 1, pp.8-11)	河村有里子
	Basic English 勉強会「基本語で考える英文整序法／語配列の手順」	
6月21日	〈GDM 初級一日セミナー〉 大阪市立総合生涯学習センター	
	(1) 模擬授業：① I, You, He, She, It ② This/That	
	(2) GDM の理論	
	(3) トレーニング	
	(4) GDM を取り入れた授業報告 (授業ビデオを用いて)	
7月12日	月例会・総会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ when (EP 1, p.65)	上島 光代
	Basic English 勉強会	片桐ユズル
	西日本支部総会	
8月10日～12日	夏期英語教授法セミナー	
	国立オリンピック記念青少年総合センター	

◆◆◆編集後記◆◆◆

Yearbook への寄稿は、3月中旬の初級・中級セミナー（京都）が終わってから、そろそろ集まり始める。それまでは原稿は2、3点しか届いていない。京都セミナーは、いわば助走台というかキャタパルトのように感じている。

セミナーは成功裡に終わった。スタッフを含めて41名が各地から集まった。会場（パレスサイドホテル）は、道路を隔てて京都御所の反対側にある。また、梅林が満開であり、よい息抜きにもなる。セミナーは、参加者の年齢層に幅があり、写真からも分かるように、特に、比較的若い世代の参加者が多かったので、華やいだ雰囲気があった。3名の non-Japanese の参加者もあった。



最近のセミナーには、毎回のように non-Japanese の参加者が少数ながら見られ、誠に嬉しいことである。特に、私にとっては、彼らは発音について大切な informant である。新年早々1月に札幌で初めて開催されたセミナーにも、スコットランドのインバネス出身の女性が参加していて、私のトークに快く協力してくれた。

私が若い教師時代であった頃と比べて、英語母語話者は、学生・生徒の英語に対してかなり寛大になっている気がする。これには時代背景が関係するのだろう。1980年代からは non-native の英語は、the English languages とか New Englishes などと plural form で呼ばれるようになっていく。今後ますます英語を使用する人が増えていき、彼らは、母語話者と同じように話したり書いたりせずに、自分たちの都合に合わせて英語を使っていくだろう。実際、東南アジアでは、informations とか advices, furnitures, stuffs のような複数形がまかり通っているし、発音では、英語の強勢拍ではなく音節拍が一般的である。つまり、母語話者は、特定の言い回しや発音が正しいか、正しくないかを判断する特権 — ownership — を失いつつあるということである。授業では、母語話者の講師は、intelligible でありさえすれば、学生の言い回しや発音を矯正することを遠慮している。それは、“politically incorrect” とか、上から目線、または、差別的になるかもしれないからである。しかし、その一方では、社会的成功のために標準英語発音を習得したい学習者も多くいるので、ジレンマ的状况である。

視点を変えれば、EFL では発音は最も軽視されている分野である。私が所属する SUPRAS という closed international e-mail list of phoneticians の意見交換の中で、最近、以下のような

現状報告が送信された。

If any layman is asked if pronunciation is important in language learning, the answer would be an unhesitating "Obviously." But on the ground, the picture is still lagging. Years ago I was at a small IATEFL meeting in Prague and I asked the Oxford guy if he had any material for teaching pronunciation. "Oh no," He said loftily "We're interested in communication." Just yesterday I visited a large book store on Piccadilly, Waterstone's, and asked about pron books. The nice young man searched around in the EFL books and couldn't find anything. We still have a long way to go... (April 13, 2016)

注：Oxford guy は Oxford University Press の営業マンのこと

一方、日本では、正統な英語をモデルとした指導が行われている。他府県のことは知らないが、大阪では中高生を対象とした英語コンテストがあちこちで開催されている。私が長年に亘り関わっているコンテストでは、審査員は母語話者2名と日本人2名というバランスがとられているのも上記の時代背景を反映している。以下は、昨年実施された英語暗唱大会の full-page 記事 (Asahi Weekly) の一部である。

大阪市生野区のプール学院中・高校で11月14日、「大阪府内女子中学生英語暗誦(あんしやう)大会」(朝日新聞社など後援)が開かれました。4人1組で寸劇を披露する「スキットの部」と、英文を3分以内でスピーチする「暗誦の部」の2部構成。日ごろみかいてきた英語表現の技量を競います。今年で60回を数えたこの大会では、約90人の中学生が、大きな声と明瞭な発音に加え、豊かな表情や演技で「英語力」を存分に発揮しました。

(安東暉/朝日新聞社)

「スキットの部」は、15校が出場し、主催者が事前に配布した英語寸劇「The Cafe」を5分ほどで演じました。京都でデートしたカップルが、それぞれ以前の学校で付き合っていた異性の友人と、喫茶店でバッタリ再会すると



「スキットの部」で1位になった大会中チームの演技。よく通る声と、聞き取りやすい発音が評価された=写真はいずれも、11月14日、大阪市生野区のプール学院中・高校

● 60年の歴史 ●

主催するプール学院中・高校は、1879年(明治12年)に、英国国教会の女性宣教師が大阪で、日本人の子どもたちに英語などを教えたのが始まりです。

暗誦大会は、「すぐれた英文に親しみ、覚え、発声することは、英語学習の入門期に最も効果的」という考えのもと、1956年に始まりました。毎年1回開かれ、2007年からは、生徒たちの個性をより生かす目的で「スキットの部」が加わりました。

96年から審査の中心を担っている伊達民和・プール学院大名誉教授は、英語音声学が専門です。「かつては、外国人の指導者がいる私立が上位、という時期が続きました」と振り返ったうえで、現状をこう語ります。「最近、公立が実力をつけています。日本人の英語教諭自身が、学生時代を含めて発音などを勉強し、生徒への指導を充実させているようです」